

平成5年度(第29次)高校教師海外研修報告書

平成5年度(第29次)高校教師海外研修 報告書

平成5年12月

国際協力事業団

108
36
GA
LIBRARY

広 報
J R
9 3 - 7

JICA LIBRARY



1117107(1)

平成5年度(第29次)高校教師海外研修
報告書

平成5年12月

国際協力事業団

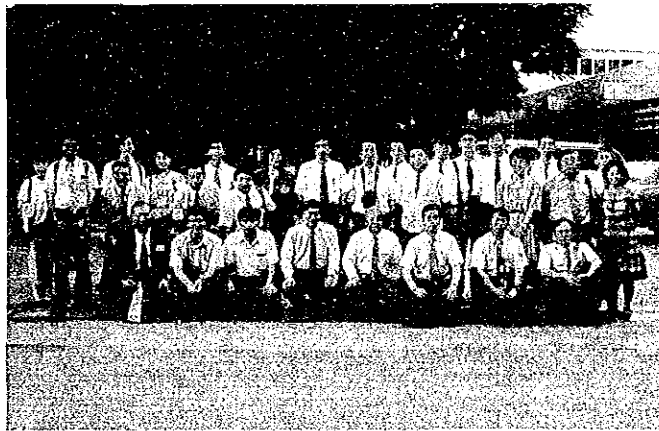
国際協力事業団

27057

〔インドネシア班〕
7/24～7/31



〔タイ班〕
8/21～8/30



〔南米(ブラジル)班〕
7/24～8/2



序 文

国際協力事業団(JICA)は、国際協力やJICA事業に関する広報活動の一環として、次代を担う高校生に開発教育(国際理解教育)を実践・研究している全国高等学校国際教育研究協議会(高国協)の加盟校の先生方を対象として、毎年開発途上国への派遣研修を実施しております。

第29回目を迎えた同派遣研修は、従来からの多数の参加希望者の要請に応え、3月から4月にかけて全都道府県の先生方を対象として募集活動をおこない、7月から8月にかけて、南米に3名、インドネシアに18名、タイに4名の合計45名の先生方の派遣を行いました。各参加者には、それぞれの訪問国の経済・社会・教育事情やJICAの活動現場を視察してもらい、開発途上国に対する見聞・理解を深めていただきました。

ここに、各参加者が感じられたことを中心に、研修報告書として取りまとめましたので、関係各位のご高覧に供したいと思います。この報告書が、今後の開発教育の一助になれば幸いです。

平成5年12月

国際協力事業団

総務部長 大島 賢三

目 次

1. 報 告

(1) インドネシア班日程		7
北海道旭川農業高等学校	樋 口 良 弘	8
青森県立五所川原工業高等学校	岩 山 政 則	13
岩手県立岩谷堂農林高等学校	千 葉 祐 悦	18
山形県立米沢工業高等学校	青 木 美 紀	21
埼玉県立杉戸農業高等学校	石 塚 裕 之	24
神奈川県立商工高等学校	遠 藤 晋	28
新潟県立興農館高等学校	内 山 二 男	32
石川県立富来高等学校	新 古 達 也	39
福井県立足羽高等学校	小 原 洋 美	45
三重県立明野高等学校	熱 田 幸 嗣	48
和歌山県立田辺工業高等学校	談 儀 善 弘	51
島根県立江津工業高等学校	飯 島 睦 美	55
愛媛県立大洲農業高等学校	水 本 正 人	58
高知県立高知農業高等学校	西 森 茂 雄	61
福岡県立門司高等学校	城 英 巳	64
佐賀県立佐賀農業高等学校	權 藤 洋 文	69
宮崎県立佐土原高等学校	中 村 裕 継	72
沖縄県立南部農林高等学校	稲 嶺 英 一	75
(2) タイ班日程		81
宮城県立仙台東高等学校	千 葉 大 健	82
秋田県立能代北高等学校	佐 藤 勇 一	86
聖光学院高等学校	多 田 裕 志	89
茨城県立藤代高等学校	宮 島 誠	92

栃木県立栃木南高等学校	天海玲子	95
千葉市立稲毛高等学校	浦部茂夫	99
東京都立農産高等学校	上松信義	103
山梨県立農林高等学校	八代四方樹	106
長野県立南安曇農業高等学校	北原千歳	109
富山県立伏木高等学校	小島隆彦	112
岐阜県立恵那高等学校	山内和幸	115
愛知県立岡崎工業高等学校	小笠原鋭雄	120
京都府立農芸高等学校	奥村功	123
大阪府立久米田高等学校	中村和美	126
兵庫県立加古川西高等学校	中村博行	131
鳥取県立米子高等学校	松本多恵	134
岡山県立高松農業高等学校	岡野吉男	138
広島県立安芸府中高等学校	花房千鶴子	140
徳島県立勝浦園芸高等学校	安永潔	143
香川県立琴平高等学校	宮武裕樹	146
長崎県立佐世保南高等学校	松尾義嗣	148
熊本県立蘇陽高等学校	神定信	153
大分県立別府鶴見丘高等学校	小野伸通	159
鹿児島県立末吉高等学校	和田良治	162
(3) 南米班(ブラジル)日程		165
玉川聖学院高等学校	幸田雅夫	166
滋賀県立水口高等学校	木村泰男	169
奈良県立片桐高等学校	吉田富夫	174
2. 参加者氏名		179

インドネシア班日程

月 日	日 程		宿泊ホテル名
	午 前	午 後	
7.24(土)	10:00 東京発	13:25 香港着 15:15 香港発 18:40 ジャカルタ着	チキニ ソフィアン ホテル
7.25(日)	08:45 ジャカルタ発 11:25 バリ・デンパサール着	自由視察	ビンタンバリ ホテル
7.26(月)	10:00 観光教育訓練センター 視察 青年海外協力隊日本語 およびSE隊員訪問	12:00 青年海外協力隊日本語 およびSE隊員との懇 親会 13:00 バリ島見学 金銀細工村、タナ・ロ ット等	同 上
7.27(火)	07:20 バリ・デンパサール発 08:15 ジョグジャカルタ着 ジョグジャカルタ見学 ボロブドゥール遺跡	ジョグジャカルタ見学 プランバナシ寺院等	センチュリーホテル
7.28(水)	09:00 林木育種センター プロジェクト視察	13:50 砂防技術センター プロジェクト視察 18:30 専門家との懇親会	同 上
7.29(木)	08:35 ジョグジャカルタ発 09:35 ジャカルタ着 11:00 JICAインドネシア事 務所表敬訪問	14:00 現地高校(SMA8)視察 18:30 JICAインドネシア事 務所との懇親会	チキニ ソフィアン ホテル
7.30(金)	ジャカルタ市内見学 モナス、国立博物館	ジャカルタ市内見学 ブロックエム、書店等	同 上
7.31(土)	09:00 ジャカルタ発	14:25 香港着 16:30 香港発 21:15 東京着	東京サンルートホテル

氏 名 樋 口 良 弘
所属学校 北海道旭川農業高等学校
担当教科 農 業



はじめに

7月23日、前日に一学期の終業式をようやく終えて、何の準備もしないままの出発となりました。まず、東京の雑踏と高層ビルに圧倒され集合場所の三井ビル47階に行ったときには、もう外国に来ているのではないかとの錯覚に陥っていました。

こんな不安な出発でしたが、8月1日に帰旭するまでの10日間大変有意義な研修をさせていただきました。まずは、この研修を企画・実行していただきました国際協力事業団の皆様、また、この研修のために貴重な時間を割いてくださった方々に心より感謝申し上げます。

1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

- (1) インドネシアの人々の暮らしと考え方を出来るだけ知りたい。

日本の生活状況が世界からみてどうなのか、これが当然だと考えていることが世界でも通用するのか。

- (2) 日本の経済援助の実際を知りたい。

経済援助の現場を実際に訪問し、その最前線で活躍されている専門家、青年海外協力隊の生の声を聞いて、援助の有り方を考えたい。

- (3) 経済成長とその功罪について知りたい。

特に、成長から取り残されやすい農業（農村部）の変化を日本の農村部の変化と対比して考えてみたい。

2. 協力活動現場の視察を通して

政府の経済援助が、その金額の多さから（約一兆五千億円）批判されることもあります。しかし、日本の援助は一方的に偏ったものではなく、かなり慎重で考えられたものであることを知りました。今回、その現状と現場の一部を知ることができ、援助の難しさと、その最前線で活躍されている方々の苦労を感じ

じ取ることができました。

「日本の常識は、ここでは通用しない」この専門家の言葉が、その難しさを表わしています。日本ではこんなにお金を出しているのだから、これぐらいの成果は上がるだろうと考えても、これは日本の常識であって相手国にとっては何の意味もありません。援助=お金=発展、こんな考え方しか出来ない私自身の考え方を変えていかなければと感じました。貧富の差が大きいのなら貧しい人々に援助をすれば良い、こんな単純な問題でもないようです。

インドネシアは資源が豊富な国です。いかに自立して発展していくかはその国自身の問題ですが、資源を持たない日本にとってもこの国の安定と発展は重要な問題なのではないでしょうか。

- (1) バリ観光教育訓練センター（高校卒業後観光産業のエキスパート養成）
 - ・国が特に力をいれている産業であり、近年日本人観光客が増加している
 - ・青年海外協力隊2名派遣（東さん——日本語教師、村山さん——システムエンジニア）
 - ・協力隊とは「現地の言葉で、現地の人と、現地のために」（東さん）
 - (2) インドネシア林木育種センター（植林用良質種子の確保・研究）
 - ・伐採林地の植林のため適応早生種の選択と優良種子の確保
 - ・施設設備の援助と技術移転——5年間の計画では無理か（田端チームリーダー）
 - ・Dr. ナイムさんの講演「援助はその地方の文化、生活習慣、宗教など正しく理解し、それなりに受け入れてやるべきではないか。」
 - (3) 砂防技術センター（技術移転から、技術開発・人材育成へ）
 - ・歴史もあり技術研究や研修機関としての地位も定着している
 - ・地域の開発と、それに対する危険性への意識がないのが問題
 - ・「よく頭に来ることがあるが、ここは日本ではない」頭のなかを早く現地に切り替えなければ（仲野チームリーダー）
- ※大変お忙しいなかお世話になりました。ありがとうございました。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

- (1) 知っているつもり（インドネシア）について、私自身、実はなにも知らなかったことにショックを受けました。気候・風俗・歴史・経済など実際

に見聞きし体験しないと分からないことが沢山あることを知りました。ジャワ原人以来の古い歴史をもち、その豊かな文化と環境ゆえに列強から狙われてきました。独立後多民族国家としてその困難性を克服するため、言語をインドネシア語に統一し、漢字看板を禁止するなど、今もその努力が続けられています。しかし、今後民族・地域間の経済格差の拡大によってはこの民族問題が大きな問題となってくるのではないかと感じました。（現在東チモールの問題がある）

- (2) 経済的には、資源の豊富さを利用し発展の途上にあるように思いました。しかし、人口の多さ（約1億8千5百万人・世界第4位）と、広範囲に広がる島々（約1万7千島）から成る国家であるためか、国民1人当たり生産額は560ドル（日本2万ドル）と低く、地域間・産業間でも格差がある様に見えました。特に、60%以上の人が生きる農村部とジャカルタを中心とする都市部また、農業と商工業の発展の差の広がりを中心に是正していくか、興味のあるところです。「経済の発展が貧富の差をますます広げている」と言うガイドさんの言葉が印象的でした。
- (3) 信教は自由ですが、約90%の人々がイスラム教であることを私は知りませんでした。そのほかヒンズー教・キリスト教・仏教などがあり、宗教を持たない人はいないとのこと。文部省の3つの方針の第1番目に「宗教心のある生徒」（第2技能・第3心身ともに健康）と、国家として力を入れているのです。日本人の私には不思議なことですが、世界から見れば宗教心の薄い日本人のほうがよっぽど不思議な人種なのです。「イスラム圏の国は、経済発展が遅れている。というのはその国を正しく理解していないところから来る偏見である。」Dr. ナイム。私には真偽の程はよく分かりませんが、そんなのかもしれませんが。
- (4) 楽しみにしていたジャカルタ第8高等学校の訪問は、今回の研修のなかでも最も楽しいものとなりました。このような場を設定して下さいました皆様に感謝。また、お忙しいなか我々のために歓迎の宴を催して下さいました皆様に感謝。午前・午後の2部授業制で1月～6月・7月～12月の2学期制と多少日本とは違いますが、生徒たちは明るく元気で活気に満ちていました。1クラス48名と多いのですが、どこの生徒も基本的には同じだと感じました。自習をしているクラスに入り込んで話をしていた小原先生、生き生きしてい

ました。皆で歌った「カラスの歌」に、「サヨナラ」？の歌を歌ってくれた1年生、インドネシアの将来もこの生徒達の目のように輝いてほしいと思わずにはいられませんでした。

6・3・3・4制で義務教育は6年間、しかも6年卒業が60％程度、高校進学率が20％程度と聞き、その貧しさの深刻さを考えさせられるとともに、まだまだこの国が発展する可能性を持っていると感じました。

- (5) 庶民の生活については、バザールやデパート・ショッピングセンターなど活気のある現場を見ることができました。日本車（小型乗用車）が日本円で約600万円、給料が20万ルピア～30万ルピア、日本円で1万～2万円程度、米が10kgで6,500ルピア、日本円で約360円、高級品（贅沢税200％以上）以外は、何を買っても円で考えると安いと思いました。たしかに日本円で考えると全て貧しく見えますが、生活はそんなに貧しいようには思えませんでした。それより日本円の強さがこれからも永遠に続くことはありえないという不安のほうが大きくなりました。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

私は農業の教師であり、農業の後継者を育成する立場にありますが、年々後継者も減少し最近では毎年卒業する200名のうち2～3名というのが現状です。外貨不足から国内食料増産の時代を経て、今は外貨減らしのために食料輸入に政策を変換して久しくなります。しかし、先進国においても途上国においても国民生活を支える大切な産業であることに変わりありません。途上国における農業の現状と生産状況を伝え、農業への情熱を喚起し、若いうちに1度は海外へ出てその技術を生かしてくるべく意欲のある若者を育てていきたいと思います。また、違う世界からみた日本の話から、もっと世界に目を向けた生徒を一人でも多く育てられるよう、あらゆる場を持って啓蒙活動を心掛けたいと思っています。

5. 所感および意見

研修期間は1学期終了間際で、準備という面ではもう少し余裕が欲しいのですが、帰国後を考えると妥当なところだと思います。期間については、もう2～3日あればと思いました。日程的には時間的に無駄のない計画が組まれ、訪

問先も申し分ありませんでした。わがままを言わせてもらいますと、多少の無駄もあったほうが良かったのではないかと。1日自由に歩ける日が欲しかった。安全を考えると無謀なことかもしれませんが。

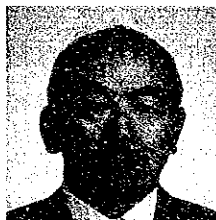
高校生4名との行動も楽しく、その元気さと物おじしない態度に新しい日本人を感じるとともに、たのしく研修ができた原因の1つでもありました。来年度は、是非本校からも参加できるようエッセイコンテストに力を入れていきたいと思います。

おわりに

ホテルのベッドの上にサイフを置き忘れて研修に出て、もう諦めていたサイフがベッドメイキング後のベッドの上に置かれていたこと。「スラマヤ バギ」みんな笑顔で返事を交してくれるインドネシア人。「センエン センエン」と観光地でお土産を売る子供たち。屋台で食べたおいしいニワトリの空揚げとかえるの足。田植と収穫が同時に行なわれている水田。いつ完成するか分からない広大な遺跡群。もう1度行ってみたい国インドネシア!! まだまだ知らないことばかりです。

最後に日本国際協力センターの伊藤さん、国際協力事業団の大橋さん、大変お世話になりありがとうございました。心より感謝申し上げます。

氏 名 岩 山 政 則
所属学校 青森県立五所川原工業高等学校
担当教科 電気工学



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

(1) JICAの海外における事業内容

私自身の勉強不足及び日本国内でのPR不足もあり、JICAの海外における具体的な事業内容は一般的に知られていないのが現状である。研修前に送付された資料を見て、研修員の受け入れ、専門家の派遣、開発調査等8項目の事業を物心両面に渡り、開発途上国に援助していることを具体的に知ることができた。それまでは、青年海外協力隊員の派遣が主なる事業とばかり理解していたのは今回の研修に参加した教師の中で私だけではなかったことを確認し、内心ホッと胸を撫でおろしたのは正直な感想である。

この中で特に研修したかった内容は、協力隊員はじめ、専門家の任地での活動現場の視察、研修と懇談会を通して理解を深めることであった。

(2) 現地高校教育現場の研修

14年前に訪問したフィリピン国以外は、主に先進国を中心に少林寺拳法の指導員として30数回渡航する機会があり、その都度現地に居住する友人や教え子達より大きな協力を得ながら、現地の高校を中心とする教育事情を研修することができた。帰国ごとに関係機関に報告を続けて来た。4年前、当時の炭田正寿校長から高校国際教育研究協議会の存在を知らされ、理事に推薦され現在に至っている。

これまではアジア、特に途上国を研修する機会に恵まれなかったこともあり、今回の研修を通じて国造りの重要な要素の一つであるのが教育であり、この一端でもある高等学校教育の現状を研修する。具体的内容として、授業等を含めた学校運営に関して、我が国と比較した場合の違い。我が国も含め、欧米諸国でも犯罪の低年齢化については、地球的規模で考えていかなければならない問題と考えている。その中で、高校に勤務する教師間で生活指導面での悩み、対策等について話し合いの場が設けられればと考えていたが、その全てについては時間の関係もあり目標に到達できなかったが、有意義な時

間を過ごせた。以下は概要である。

私達が訪問した高校名は第8高等学校で、校長、副校長3名、教諭81名、生徒数1968名、午前中に登校して勉強している生徒数が1000名、午後が968名と2班に分けられ授業をしていた。

校長先生の説明によると、文部省の教育方針は宗教心のある生徒の育成、技能を持つ生徒の育成、精神・肉体ともに健康な生徒の育成であり、この3つを教育目標にしているとのことだった。インドネシアではイスラム教を信仰している人が国全体で85%を占めており、校内にもお祈りする場所が設けられていた。第8高等学校では、国立大学への進学率を70%を目標にしているため常に教師、生徒のレベルアップに努めているとのことだった。外国語は英語とドイツ語を指導しているが、来年度からはこれに日本語を取り入れる予定とのこと。現地の三井物産では、インドネシアの高校で優秀な生徒を3名選び、奨学金を出して日本の大学に留学させる制度を設けており、今年はそのうちの2名が第8高等学校から選ばれているとのことだった。

また、制服は公立私立を問わず、スラックス及びスカートの色で分けられており、高校生は灰色、中学生は紺色、小学生は赤色。そのため、登校している生徒を見て小・中・高の違いは理解できるが、学校名までは知ることができない。

授業形態については、我が国と大きく異なり、午前と午後の部に分けられていること。当然授業時間が不足なことが考えられるが、教師から課題を出して家庭学習の充実を図っていることやOBが進学希望者であろう(?)積極的な生徒達に日曜日を返上し、教科の指導をしていること。また、授業参観をさせてもらった感想は、彼等の表情は明るくこちらの質問にも「医者」「軍人」「弁護士」等、はきはき答えてくれたのが私の心の中に爽やかな印象として残った。

将来に対する希望、夢を堂々と話せるのは私の経験では、我が国では小学生止まり。年を重ねるうちに徐々に夢を持たなくなっているのが現在の高校生の姿のように思っている中で、大切なことを教えられた思いがした。今後の教師生活に活かしたい。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

① 観光教育訓練センターの視察を通して

ここでは日本語の教師として頑張っておられた東純子隊員とシステムエンジニアとして勤務されていた村山裕子隊員と会うことができた。両隊員からくじけそうになった時、現地の方々の協力もあって乗り越えた経験談を聞かされ、臨場感もあり感動した。

この訓練センターは日本、英国、ドイツからの援助を受けて成り立っていた。教員数は220名、学生の割合は男子7割、女子3割で修業年限は2年、3年、4年コースがあり、2年コースは客室部門、フロント部門、会計部門、レストランサービス部門、調理部門を指導。3年コースはツアーマネージメント、ホテルマネージメント（経営学）を指導し、4年コースは将来の管理職を養成するための総合的な指導をしていた。学生には、政府から年間150万ルピア（1ルピアは約0.06円）の奨学金が与えられており、学生の負担は80万ルピアで現地では高額なものであった。卒業後、希望者は日本のホテルで研修を積む制度もあり、現在6名が富士屋ホテルで研修を続けている。

卒業後の就職率が良いため、かなりの狭き門であり、毎年3000人位の受験者があるが、合格者は300人。このうち卒業する学生は約80%。退学者の理由は経済的理由によるものが大半であるが、退学者についてはセンターから証明書を出して、就職も紹介しているとのことであった。また、これまでの奨学金の返還は求めている。

② 林木育種センターの視察を通して

インドネシアは世界有数の森林国であり、国土の70%が森林を占めている。国内では自然発火による森林火災および木材の伐採によって1年間で我が国の山梨県の倍の面積に相当する森林が消滅しているため、次の世代に残すために育種センターでは毎年30万ヘクタールの植林を進めていくことを目標に研究を続けている。そのためにはインドネシアの気候風土に合い、短期間に木を成長させることのできる優れた種が必要ということで6名の日本人専門家が地元の研究員を指導しながら研究活動を進められていた。

③ 砂防技術センターの視察を通して

インドネシアは火山の数が世界で一番多く129ある。その殆どが活動しており、現在噴火しているのが3つある。ジャワ島には、ボロブドゥールという世界的文化遺産とも言うべき仏教遺跡があり、これらの遺産を守るためにも、またインドネシア人口の約70%が住んでいるジャワ島を守るため、1982年にこのセンターが出来た。

このセンターの目的は、実際にダム工事をするのではなく、建設に必要な技術者の養成を目的としている。私達が見学したのはセンター内に設けられた山地の模型に人口的に雨を降らせ、それによって土砂がどのようにして麓の人家に被害をもたらすかのメカニズムを研究するための実験装置をもとに、インドネシアの研修生を対象に熱心に指導されていた。土石流を防ぐダム工事建設が進んでいることもあり、ここ10年は大きな被害は起きていないが危険地帯は多数あり、多くの専門家を育てたいと熱っぽく語っておられた。ここでは、ダム工事建設の指導のみでなく、災害時の被害を最小限度に押さえるために連絡網の充実を図るにはどうすればよいのか等についても指導されていた。

(2) 疑問に思ったこと

協力隊員及び現地の J I C A 職員の献身的な活動を見せていただき感銘を受けることばかりであった。疑問というより、ボランティア精神で参加している隊員の帰国後のアフターケアが決して満足とは言えない状況を知り、このことの充実が図られることを願っている。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

ともすれば、日本からの援助が末端にまで行き渡らず有効に使われているのか多少疑問を持って研修に参加したが、観光教育訓練センターの所長さんの話をはじめ、現地の関係者との懇談の中で限られた時間ではあったが私なりに納得のいく話のできたので満足できた研修であった。

欲を言えば、日本人の P R 不足によりこれらの活動の全てが現地の方達に伝わっていない印象を受けた。「金も人も提供はしているが、日本の顔が見えない」という印象を受けたというのが率直な感想である。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

専門は電気工学ということもあり直接教科と離れてはいるが、今後は、この貴重な体験をもとに高校国際教育のあり方、必要性を多くの同僚に伝え、世界的視野に立ち高校生達にも伝えていきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

夏季休業中の研修であり、授業及び校内分掌等に迷惑をかけることなく参加できるとすればこの時期が最適と思う。また、期間も8日間というのが研修目的を考えると適切な期間と思った。

(2) 研修日程および訪問先

現地の状況もありある程度の理解はできたが、夕食も含め1日の日程が終了する時間が午後8時を過ぎることもあり、さらに翌日の起床が早朝という日程は正直言って辛く、そのために睡眠不足気味だったことを考えると、今後は研修場所の精選を進められた方が良いと思った。

(3) その他全般的な所感

この研修を通じて、北は北海道から南は沖縄までの多くの友人を得ることができたことは今後の人生に大きなプラスになると確信している。今回私達と同行し、細部にわたって動いて下さったJICAの大橋さん、JICEの伊藤さんに衷心より感謝申し上げおわりとします。

氏名 千葉 祐 悦
所属学校 岩手県立岩谷堂農林高等学校
担当教科 農業（農業土木）



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

途上国は、気候的にも恵まれた南半球に位置し、食料生産も特に高度な技術を要せず自然発生的な生産体系で収穫可能な地域である場所に存在しているように思われる。また、それらの国々は個人の自己教育力や国民の識字率が低く、文化や生活に対する考え方・様式が宗教的に大きく影響されているという特徴を持っている。さらに、産業構造における共通点は、長期にわたり第一次産業に従事する人口が多く、第二次・三次産業の育成が遅れているということである。

途上国は、先進国と称される国々の自国に於ける食料生産技術を確立させ基盤の整備後第二次・三次産業が発展した過程を取っている形態と比較すると大きな違いがあるように思われる。

今回の研修に参加するにあたり、インドネシアは総人口の約55%の人々が第一次産業に従事していることから、農業生産における基盤整備の現状と実態を視察することによって途上国に対する理解と援助の方向性を農業土木的な観点で考えることに主眼をおいて参加した。

2. 協力活動現場の視察を通して

今回の日本のインドネシアに対する援助活動の視察は、途上国での援助活動を実際に目の当たりに見学することができ、経験の少ない私にとっては新鮮で途上国への援助に対する考え方や認識を新たにさせられた研修であった。

途上国に対する援助の方法は、援助する側の基本的な考え方によってかなりの国々の差異はあると考えられるが、日本における援助が経済活動を中心とした援助ではなく、その国における産業基盤を重視しそれを支えるための援助であることに接することができたことは良かった。

特にジャワ島の林木育種センターや砂防技術センターでの農林土木的な農林生産分野における産業基盤の整備に関する援助活動の視察は日常的に生徒に教

えている内容が日本のみならず世界の人々の生活に直接的に役立つものであったことから、常々農業土木教科は経済活動としての生産のみに捕らわれず、人間を取り巻く環境を維持するためにも大事な教科であるために全地球的な範囲で指導する必要があると考えていた私にとっては、非常に参考になった一つである。

また、BPLPでの青年海外協力隊の活動は真の協力であると強く感じる事ができた。それは協力隊に参加する青年たちの考えかたがどのようなものであれ、事実その国に赴き文化や生活習慣・宗教・環境の壁を乗り越え我が身を呈して途上国の人々の生活向上を願い活動している姿は、まさに真の国際協力であり自国のみの利益に捕らわれることのない人間として共存共栄を願う心温まるものであった。私たちはこのことを次代を担う子供たちに明確に伝えていかなければならない責任があると痛感させられた視察であった。

ただ、インドネシアに対する援助は青年海外協力隊であれ技術協力であれ現在我が国が派遣している職種は、多岐に渡ってはいるものの若干偏っている傾向があるのではないだろうか。技術革新に対する援助は数多く行われているものの農業とりわけ農業基盤整備の技術協力が立ち遅れているのではないだろうかかと強く感じられた。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

『途上国』という言葉の響きは、私にとってはマスメディアからの情報を通じて得られた狭い範囲の『産業や生活水準が非常に立ち後れている国』というイメージが強かった。今回の研修で途上国と称されているインドネシアの人々の生活実状は、確かに私たちの日常の生活と比較すると私たちの生活様式とは隔たりが感じられるものの、それはあくまで外面的・感覚的なものであって内面的にはそれほど立ち後れてはいないと感じる事ができた。

日本はすべて比較において物事を評価し価値観を見いだしているがインドネシアの人々が、日本では若干薄れてきている民族意識や村意識を強く持ち、物質的なものに対する価値観よりも人間的な結びつきに対して価値観を見だし伝統や風習を大切にしながらそのことに誇りを持って生活をしている姿に接したとき、改めてインドネシアの人々の人間的な豊かさを認識する事ができた。

このことは、インドネシアとの国際理解・協力を進めるうえで大切な事から

であると共に、生徒たちに確実に伝えなければならない事項のひとつであると
考えられる。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

途上国では人口の増加に対して食料生産が追従できず、食料生産が深刻にな
ってきている。これらの国では、食料の安定供給を図ると共に他産業と農業と
の格差を是正し社会全体の均衡ある発展を図ろうとしている。

特にアジアは、稲作を中心として農業発展を望むところが多く、我が国の稲
作技術援助に対する期待、中でも稲作の基盤となる土地基盤の整備すなわち農
業土木に対する期待が大きいと考えられる。

今回の視察をとおして、日本のみならずこれらの国々に対して自然・社
会環境を理解し、どのような技術を適用し開発・基盤整備の協力が必要である
のかを今後生徒たちに教えていかなければならないことを痛切に感じた。今後
は、この経験を基にして日常の教科指導の中で、広い視野に立った農業土木技
術のあり方を指導していきたい。

5. 所感および意見

今回の研修は、移動等研修日程に若干の厳しさはあったものの研修期間や研
修時期については申し分なく、大変有意義な研修であった。

今回の研修を企画、お世話していただきました国際協力事業団の方々に感謝
し、報告いたします。

氏 名 青 木 美 紀
所属学校 山形県立米沢工業高等学校
担当教科 英 語



この度は平成5年度高校教師海外研修において、インドネシア派遣の栄を賜りましたこと、心から感謝申し上げます。観光旅行では目にすることのできないものを見、又現地で働く人々のお話を直接お伺いできましたことは、得難い貴重な経験であったと思います。

さて、この度の研修に際し特に主眼を置いた点は、以前から政府開発援助（ODA）に対して抱いていた漠然とした不安のようなものの所在を明らかにし、その解答となるものを模索することでした。又、開発教育に関しても何をすればいいのか分かりかねる状況でしたので、足がかりを得られればと思っておりました。

出発前のオリエンテーションで、ODAに対する批判について説明を受けました。援助の効果については、1. 相手国の役に立っていない 2. 援助が底辺まで届いていない、ということ、また援助の在り方については、1. 日本の企業のための援助ではないか 2. 大量生産・大量消費が地球規模の環境破壊を引き起こしていること等が指摘されているとのことでした。以前から感じていた漠然とした不安が、これらの指摘の中に明らかにされているのを感じました。

今回の研修の中では、国際協力事業団（JICA）で担当なさっておられる技術協力・無償資金協力の現場のうちのいくつかを見せていただきました。

まず最初に協力隊活動現場視察ということで観光教育訓練センターを見せていただきました。敷地内に実習の場として本物のホテルを有するすばらしい施設と、そこに学ぶ生徒の笑顔も大変印象的でした。そこでもう一つ印象に残ったことがありました。同校の説明を受けた後、質疑応答の際に、同行の高校生が途中で出合った物売りの子供の話に触れ、「皆が幸せであるために日本の高校生にできることは何ですか。」と、同校の校長に質問しました。私は、優しい気持ちに満ちた、高校生らしい純粋な良い質問だなと、とても感心しました。ところが彼の答えは『資金援助』でした。現実を目の前にたたきつけられたような気がして妙に白けた気分になりました。しかし、よく考えてみれば彼の答えは、現実的で非常に自然なものです。私達は、あまり内実を知るチャンスを与えられていないだけに、

容易に援助という言葉に酔ってしまう傾向があるのかも知れません。しかしながら同時に、過剰な援助がこの国の成長をむしろ阻む結果になっているような危惧を覚えたのも事実です。

次に、私達は林木育種センターを訪れました。毎年80万から130万ヘクタールの森林が消失しているという事実に大変驚きました。専門家の方は夢物語だとおっしゃっていましたが、インドネシア政府は、1998年までに440万ヘクタールの産業造林の計画を立てています。5人の日本人の専門家が、現地の方々と協力して日々研究に励まれている様子、大変素晴らしいことと思います。一方で、私達一般の人々はなぜ森林がどんどん消失しているのか、根本的なことを忘れている気がします。英語指導助手の中には、決して割りばしを使わず、自分のはしを持ち歩いている人もいます。ですが、私達日本人は毎日昼食に膨大な数の割りばしを無駄に捨てています。実際に私も、毎日毎日膨大な量の紙を浪費しています。片方で援助し、片方で浪費する。非常に矛盾を感じます。そして日本人の多くはこの矛盾に気付いていない。お金や施設で援助すれば良いのではない。私達一人一人の意識を変えることの方が、より大きな援助になるのではないのでしょうか。

インドネシア砂防技術センターでは、SABOという言葉がもはや国際語になっていると聞き、日本人としてとても誇らしく、現地で働いていた方々に頭が下がる思いがしました。本当に素晴らしい援助だからこそ、その援助をより効果的なものにするために、私達一般人に対する啓蒙も又早急になされるべきだと思います。

先日、非常に興味深い指摘を見つけましたのでここに引用します。

日本がインドネシアを重要国ととらえ、日本企業が進出してくるのは、原油、ガス、金属鉱石が豊富な資源大国であること、そして他のアセアン加盟国の総計よりも多い、世界第4位という1億8000万人の人口大国であるインドネシアの潜在的市場価値によるものであり、かつ日本の貿易の大動脈で生命線といわれるマラッカ海峡の沿岸国である、という地政学的理由によるものである。(①)

援助も又然り。そこに何の利益も見出せなければ援助も又なされることはないでしょう。援助という行為の美点にばかり目を向けては、ただの偽善だと思います。そういう意味で、現地の専門家の方が「ビジネスと割り切っている。」とおっしゃったことは非常に潔く聞こえました。ただし、利潤ばかりを追求しては、それは

もはや援助ではあり得ません。

1990年1月の『コンパス』紙は、海部首相の欧州訪問に関連して、次のように書いた。

「日本は製品を売りこむのではなく、国際社会でその責任をはたすべきであり、第三世界に対し援助の手をさしのべるべきである。…中略…どの国も固有の価値をもっている。どんなに日本人の勤勉さに感心しようと、どんなに少額の援助であろうと、このような傲慢さをともなう援助なら拒否した方がました。」（②）

経済大国、援助大国である日本に、インドネシア人は『親日感情』と『反日感情』というアンビバレントな感情を抱いています。また援助自体にも二面性があります。これらを考えあわせると、援助が非常に微妙な問題であることがわかります。先日、新聞で邦人の方がバタム島で殺害されたことを知り、大変悲しく思いました。インドネシアの伝統文化に触れ、片言のインドネシア語で微笑みを交わす体験をさせていただいただけに、二度とあって欲しくないなと思いました。日本の援助が、両国の友好の懸け橋となることを祈り、これから以後、さまざまな機会をとらえ、この研修で見聞きしたことを生徒達に伝えていきたいと思えます。

最後に、このような機会を与えて下さいました関係者各位に、重ねて感謝申し上げます、報告とさせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

- ①小川忠(1993年)『インドネシア多民族国家の模索』 岩波書店 東京 99頁
- ②同 177頁

氏名 石塚裕之
所属学校 埼玉県立杉戸農業高等学校
担当教科 英語



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今回のこの研修は、私にとり初めての海外渡航であるので、日本以外の諸外国とインドネシアを比較することはできないが、次の3点に主眼をおいて視察を行った。

- (1) インドネシアの文化、産業、国民性、国民生活等を実際に見て体感すること。
- (2) 日本の政府開発援助（ODA）がインドネシアにおいて具体的にどのようなプロジェクトとして利用されているのか。また日本の対外援助は、物的援助ばかりで、人的援助がなおざりにされているという批判があるが、現地では実際にどのような評価を受けているのかということ。
- (3) 私の専門が英語教育なので、インドネシアで英語がどの程度通用するのかということや、現地高校での英語教育の方法と実際及び高校生の英語会話能力がどの程度であるかを確認すること。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

私が実際にこの研修に参加する前までは日本の政府開発援助（ODA）と国際協力事業団（JICA）の役割について、どのような違いがあるのかということが理解できなかった。（もちろん、これは私の不勉強のせいであるが）しかし、今では日本のODAには多種多様な援助があり、特に人的援助として技術協力を行い、その業務をJICAが中心的役割を担い運営しているということが理解できた。またJICAの事業としては、①研修員受入事業、②青年招聘事業、③専門家派遣事業、④プロジェクト方式技術協力事業、⑤青年海外協力隊事業等の多岐に渡っているということがわかった。技術協力と一口で言っても、単に専門家を派遣し上に立って指導をするだけではなく、現地に根ざした実になる援助を心がけており、ゆくゆくは独力で自立してい

くことのできる力を養成しようとしている、先を見通した援助を考えているとのことであった。この点も私が視察に出かける以前に抱いていたJICAの援助像とは異なるものであった。

(2) 疑問に思ったこと

事前の私の勉強不足もあり、なるほどと感心することは多々あったが、疑問に感じたことはほとんどなかった。ただ一点だけ疑問というか考慮すべきではないかと感じたことは、青年海外協力隊の待遇についてである。詳細についてはわからないが、協力隊員の報酬の低さと、帰国後のアフターケアについては今後検討、改善されるべきであると考え。青年海外協力隊の制度はとてすばらしいものであると思うが、いくらボランティアとは言え、報酬については低いと思う。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

(1) 私のインドネシアという国に対する認識はとても低く、バリ島がインドネシアであるということもはっきりとはわからなかった程である。無知を恥じる次第である。実際に訪問してみると現地人はみなとても明るく、生き生きとしているように見えた。観光地では多数群がる売り子にとても悩まされたが、彼らの表情には悲壮感もなく底抜けに明るいと感じた。

そして彼らの対日感情も私が想像していたほど悪いということではなく、むしろ良いのではないかと感じた。しかしそれは不幸な過去を精算してしまったということではなくて、日本の経済力によるものではないかと感じるのは私の邪推であろうか。大多数のインドネシア国民は、我々日本人と比較すると、物質的には貧しいかもしれないが、彼らは毎日の生活を十分楽しんでおり充実しているように思えた。物質的、経済的にはとても恵まれているとは言えないが、心の余裕と言うか精神的な豊かさについては高いレベルにあると感じた。

(2) 途上国援助については、バリ島の観光教育訓練センター、ジョグジャカルタの林木育種センター、砂防技術センターの3ヶ所を視察したが、いずれにおいても派遣された方々は一生懸命任務についておられるようであった。現地の生活習慣や仕事に対する考え方の違いから数々の障害があるが、現地に根ざした協力を心がけ、インドネシアが自立できるように根気強く指導され

ていた。特に青年海外協力隊員の献身的な努力には頭が下がる思いがした。そして彼らの協力がインドネシア発展に少しでも寄与することができればと願うものである。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

授業等の教育活動においてすぐに活用できる教材といってもこれというものは無いが、最近では英語の教科書にも海外協力に関するエッセイが扱われているので、今回の経験を実際の海外協力の実状を授業等を通じて生徒たちに伝えてゆきたいと思う。

5. 所感および意見

- (1) 研修時期および期間については、特に問題となることはないと思う。
- (2) 研修日程および訪問先については、まず今回の日程は飛行機での移動が期間中2度あり、それも早朝の起床、前夜のパーティー等、多少きついなと感じられることがあった。もう少し余裕があると良かったと思う。また訪問先については、我々はみんな高校の教員であるので現地高校の訪問をもっと重点的に行ってほしかった。今回訪問した国立ジャカルタ第8高校は名門校ということで生徒たちはとても活発に授業に参加しているようであったが、生徒との交流、教員との交流、授業参観と、もう少し十分な時間があればもっと得るものの多い研修になったのではないかと思わず残念に思った。今後の研修の企画作成にあたって御配慮願いたい。
- (3) その他全体的な所感

今回は高校生のエッセイコンテストで入賞した高校生4名も同行した海外研修ということで幾分新鮮な感じがしたが、若い純粋な感性と共に過ごしたことは私にとっても大いに刺激になった。なかなかおもしろい企画であると思う。

JICA主催によるこの事業は、日頃目立つことのない海外協力の実状を高校の教員に認識させるということと、全国各地から参加させることにより教員の交流という2つのメリットがある素晴らしい企画であると思う。また率直に言って発展途上国であるインドネシアへの研修と聞いて、あまり乗り気ではなかったし良いイメージがなかったのですが、実際に現地を視察する

ことができ、また多くの誤解や偏見を正すことができたこの機会を頂いたことに深く感謝の意を表したいと思います。

最後にJICAはとても素晴らしい仕事をしている訳ですから、この事実を広く国民に知ってもらうように広報活動等に力を入れるべきだと痛感しました。この企画に参画された多くの方々の御骨折りに敬意を表します。どうもありがとうございました。

氏 名 遠 藤 晋
所属学校 神奈川県立商工高等学校
担当教科 工業（電気）



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

- (1) 私は、13年前に青年海外協力隊に参加しケニア国に派遣されジョモ・ケニヤッタ農工大学の初代隊員として技術協力を実践し、また、7年前に経済協力推進協議会より経済・技術協力の現場（インドネシア、マレーシア、シンガポール）を視察させていただきました。これらの経験から経済・技術協力の実施方法が途上国の経済状況、開発状況によりどのように違い、また、それらにより、その効果がどのように表われているか。
- (2) インドネシアは、多島そして多民族国家であるので、それが開発にどのような影響を与えているか。
- (3) インドネシアは、国の統一に宗教の影響を受けた歴史を持つ国であるので、その宗教が人々の社会生活の中でどのように浸透し、また、それがどのように民族文化として発展してきたか。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

インドネシアへの砂防技術協力は、1970年から本格的に始まり、当初の火山砂防から総合的な土砂災害に対する一般砂防へと対象を拡大され、現在の「砂防技術センター」となっています。そこでは、「砂防公開コース（初級）」、「砂防技術コース（中級）」、「応用砂防技術コース（上級）」などの研修や「第三国研修」といい他の途上国の人々を対象とする研修もインドネシア人スタッフを中心に実施されるまでに技術移転が来ています。これは、何にもない所で技術用語辞典から作られた専門家をはじめ、その技術移転を20余年にわたり継続された専門家の方々のご苦勞とご努力によるものだと思います。それから、特に「第三国研修」は、ただ単に砂防事業・技術を周辺のアジアの国々に啓蒙普及するだけでなく研修を実施する側にとっては大変な自信になり、研修を受ける側にとっては先進国でなく身近な途上国で受ける

研修なので非常によい刺激になると思います。これは、火山が多いインドネシアの火山砂防から始まった技術協力ですが、これから、この様に各途上国の地域性を生かした技術協力の拠点となる技術センターを作っていけたら、より効果的な技術協力が出来ると思います。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

途上国は、街に活気があふれ人々は陽気で明るく心は非常に豊かで遅く生きています。それでも、一般的な日本人から見ると貧しいとか物がないとか街が汚いとか思うかもしれませんが、私には途上国の人々が、この暮しで十分と思っているように感じました。そうした意識を持った人々が多い中に援助していくのは非常に難しいことで、その設定をあやまれば人々に根付く援助とならないと思います。特に、機材供与・インフラ整備については技術レベル、経済状況などに配慮し途上国の実状に合った援助をする必要があると思いました。また、この研修旅行において技術協力の重要性が、これから一層高まると感じました。この分野は、これまで日本が不得意とした分野ですが、タイ国のモンクット王工科大学、インドネシア国の砂防技術センター、ケニア国のジョモ・ケニヤッタ農工大学など、その他にも成功しているプロジェクトは沢山あると聞いております。いずれの場合も専門家の方々等の熱意、努力によるところ大ですが、JICAのこうしたプロジェクトに対する理解、そして継続的な協力があってこそ成り立つものと思います。これらを考えると技術協力は、当初計画5年であっても15年、20年と考え継続かつ拡充する方向で実施していただきたい。また、それに合わせてノウハウの蓄積と人材確保ということでライフワーク専門家の養成を充実していただきたいと思います。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

- (1) インドネシアの各地方の人々の生活の様子や文化・宗教の違いについて
- (2) インドネシアの高校及び高校生の学校生活について
- (3) インドネシアの歴史や政治・経済について
- (4) 協力隊や専門家の方々の協力活動について

以上について、スライド、パネル及びカセットテープなどを用いて高国協での教員研修会及び生徒研究発表大会等で紹介したい、また、学校内では部活動や

文化祭等を通して生徒に伝えていきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

7月下旬は、まだクラス指導等、校務が忙しい時期でもあり8月上旬にしていただけたらと思います。研修をしっかりとするためには、期間をもう少し長くして2週間位が良いと思います。

(2) 研修日程および訪問先

研修日程にもっと時間を割き、訪問先での見学、説明、質問等にもっと時間があつた方が良かったと思います。特に、協力隊員の活動現場は、もう少し田舎の方に設定していただき2箇所は視察したかった。協力隊員の大部分は地方で活動しているので、協力隊員の一般的な活動や生活を理解すると共に、田舎に入れば、その国のごく普通の人々の暮らし、文化が吸収できるし途上国における都会と地方の人々の暮らしの違いを見ることが出来ると思います。専門家の活動現場は、技術協力の手法を考えるには非常に良かったと思います。また、小グループを作りグループ別自主研修を取り入れ、夜ミーティングなどを開き、各自が感じたことや成果などを話し合うことにより研修がもっと有意義なものになると思います。夜ミーティングだけでも行った方が良いでしょう。ただこれには事前に自分でしっかりとした研修テーマを持ち、事前調査も十分に行う必要があると思います。

(3) その他

バリ島では、協力隊員がリゾート地（観光客が300万人以上、その内、日本人100万人以上）という協力活動する上で、やりにくい環境の中で淡々と足が地についた活動をしている頼もしい姿を見ることができ、また、ヒンドゥー教徒が8～9割ということもあり、伝統的踊り、建物様式、宗教など、その文化の片りんに触れることができました。中部ジャワのジョグジャカルタでは、仏教遺跡のポロブドゥール、ヒンドゥー教遺跡のプランバナン、ジャワ更紗の作業工程、そして、王室での夕食などインドネシアの古都の雰囲気をも十分に楽しむことができました。ジャカルタでは、途上国の都会の姿、その中での人々の生活、そして、イスラム教文化を見ることができました。また、ジャカルタ第8高校での高校生同士の交流を見ていると、なんの違和感

もなく打解け合っている姿を見ることができました。これからは、欧米だけでなくもっと途上国に目を向ける機会を作り、また、そういう努力をしなければならぬと感じました。今回の研修には、高校生4名が同行しましたが教員と異なる視点を持っていますので非常に良い刺激を互いに与えられたと思います。今後も、そういう機会を作られたらと思います。

最後になりましたが、今回このような研修の場を与えてくださいましたJICAに感謝し、そして、この様に突り多い研修を無事終える事ができたのは、ひとえにJICAの大橋様、JICEの伊藤様、山下様のご苦勞に負うところでございます。深く感謝いたします。ありがとうございました。

氏 名 内 山 二 男
所属学校 新潟県立興農館高等学校
担当教科 農 業



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

日本と同じアジアの国、インドネシアを知ること。さらに要請を受けて送り込んでいる青年海外協力隊はじめ日本の援助の成果の様子を視察し、本県の高校生に国際理解に対する認識をもたせるための指導材料を得ること。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

① 観光教育訓練センターにて

当センターでは観光に必要な知識、技術を2年、3年そして4年とそれぞれのコースに分かれ、学ぶ。日本へも研修に行く。

この島では農業と同じくらい観光産業が盛んであり、今後も重要な産業となるので国からも資金援助をしてもらいながら教育に力をいれていきたいと考えている。高校卒で受験資格があり、筆記と面接で合格者を決める。今年は15倍の競争率の中から450人が合格し、入学している。

日本の協力隊員2名が活躍していた。青年海外協力隊は発展途上国の人々と生活を共にしながら、持てる技術を活かしてその国の国造りに協力している。その活動は“草の根協力”として高く評価されており、途上国からの隊員派遣要請数は年々増え続けている。この活動は国際協力の一貫で、現地にはいって現地の人と活動することにより、その国の文化発展に協力していくことが使命とされている。単身赴任が原則で期間は2年、その間帰国はできない。

インドネシアには現在50名くらいの協力隊員が各地で活動している。

東 隊員……ボランティアは好きで高校時代からやっていた。世界の人々に幸せになってほしいと思っている。日本語講師として働いているが日本語はたいへん人気がある。日本語通訳の仕事は公務員の3倍の給料がもらえるので、こことは別に

専門学校に行く学生もいるくらいである。日本との生活習慣の違いは意外と大きく、やっていることを現地やそのまわりの人たちから理解してもらうのに時間がかかる。

村山隊員……システムエンジニアとして今年4月から働いている。

幼少時から協力隊員になりたかったが、手に職がなかった。大学卒業後コンピューターの会社にはいり、それを使って行こうと考えた。休職参加している。

② 林木育種センターにて(田畑氏のお話)

インドネシアは日本の5倍の面積がある。その6割が森で世界的な森林国である。カリマンタン島の森は年間80～130万ヘクタール減少している。原因は山火事や伐採開拓などで、国として放っておくわけにはいかなかった。国の政策として森林資源の充実をうたい、1998年までに440万ヘクタール植林したいと云っている。それは夢物語の数字であると思うが年間30～35万ヘクタールの植林ができればいいと考えている。それにしてもかなりきつい数字で品種改良等育種に力を注ぎ、伐採された熱帯林に代わる優良人工林の大量増殖を計る使命がある。

当センターは13億円の巨費を投じ、昨年完成したばかりである。このプロジェクトは1992年から5年間で答をださなければならない。品種としては生長の早い将来的に紙資源となるものを最優先に考え育種している。カリマンタンやスマトラの森が今も激滅しているので、早く植林を始めたい。

③ 砂防技術センターにて(酒谷氏のお話)

この技術協力は1970年から本格的に始まり、このジョグジャカルタではプロジェクト方式の技術協力が1982年から始まっている。第一期目のプロジェクトはインドネシアで最も問題となっている火山砂防を対象としたもので、1990年までの8年間にわたり火山砂防技術センターにおける約500名の技術者の研修や現地に適した技術の開発・研究がなされ、火山砂防技術の啓蒙普及に寄与した。前プロジェクトは一応の成果をあげ、砂防技術について理論上はだいたい理解してもらえたが、現場への適応方法が確立されていないことから1989年にインドネシア側から正式にプロジェクト方式技術協力の要請があった。1992年センターの設立に合意し、その4月から5年間の予定で新しいプロジェクトがスタートした。

プロジェクトの内容は以下の3項目である。

I. 技術開発

様々な土砂災害に対処できるように現実的・実用的な技術開発を行うため、現地試験施工や各種実験を取り入れ、インドネシアの自然社会経済及び環境条件を考慮した工法を開発し、マニュアルやガイドライン作成等の基礎資料を得ること。

II. 研修

前プロジェクトの実績から「公開コース」「砂防技術コース」及び「応用砂防コース」という3つの研修を設定して官庁職員や技術者への普及を図っている。

III. 広報

いままでの調査・研究の成果を積極的かつ強力に全国に啓蒙普及する目的でセミナーの開催、技術参考資料やSTC（砂防技術センター）ニュースの発行、各種パンフレットの作成、データベースを利用したの災害データや砂防構造物台帳の整理等をする。

④ JICAインドネシア事務所にて（高橋事務所長のお話）

インドネシアはODAの最大の受入れ国である。12～13億ドルでその内9割が有償資金援助となっている。また、現在600名の若者が日本において研修をしている。

インドネシアはこの2～3年に生産が急に上がった。日本の援助の力も大きかったと思う。その一方で省庁が多く、たとえば農業と林業にまたがっての援助が難しいなど調整と時間の点で問題となる。

プライドが高く政府レベルのボランティア（協力隊）は受け取らない。エキスパートとしてなら受ける。協力隊はジュニアエキスパートとして受けている。日本の立場としては依存（輸入）が多いので要請を受けたらある程度は援助しておいた方が依存しやすい。

この事務所は3階の建物で21名の日本人が勤めている。また現地の人を30名雇用している。

⑤ 現地高校（第8高校）訪問（学校長のお話）

学校概要

午前と午後に分かれ全部で1900名の生徒がいる。教師は85名と大規模な

学校である。午前は1・2年生、午後は2・3年生が授業をやる。

教育方針は 1)宗教心を育てる

(人口の90%が回教だからお祈りの施設がある。)

2)技能をもたせる

3)心身ともに健康になる

※それとは別にこの学校としては進学率(国立大学)を70%まで引き上げることを大きな目標としている。

英語とドイツ語は授業としてやっているが、日本語は希望者が多いが肝心の講師がいないのでやっていない。

本日文部省から出席予定だったが用事ができ、出席できなかった。

(2) 疑問に思ったこと

省 略

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

実質一週間くらいの走りばしりの研修では細かいところはとても見れない。バスの窓から見える風景、人の服装や表情そして建物の様子を見、さらにガイドさんの細かな説明による推察も含めると、いろいろとこの国の実状が目につくようだ。

乾季と雨季に分かれるが、日中は一年を通して暑い。しかし人々はしっかりとした服装だったと思う。もっと乱れているのでは……と思っていたのは私だけか。さらに歩き方も目的があるように以外と早い。感心した。ただし、ルーズな点は随所に見えた。飛行機に乗るのに睡眠時間を削ってまで2時間も前に空港で待つ。またホテルではいちばん眠い朝方3:30に部屋の照明がついたり、となりの客と間違えてモーニングコールをかけてくるのには閉口した。これで五つ星の高級ホテルとのこと。びっくりした。砂防技術センターの人が説明してくれるように、日本だって30年前は同じだった。この国の人たちも時間をかければ社会も発展し、直ってくるはずである。相手の良いところを見る心がけが大切である。ここは日本ではない。自分の頭の中だけ日本の尺度そのままだ。自分の頭を切り替えることが必要である。この国の風俗・習慣を尊重すべきである。しかし自分は日本人であり、日本人としてうまく付き合っていくことが大切で、それを共存共栄というのであろう。

途上国援助に関しても詳細はとて知るよしもないが、原則としてインドネシアに対しては有償（9割）ということで資金援助されているとの事、豊富な天然資源をバックに工業国としてのビジョンをもつ国なのだから当然にも思えた。ODAの最大の受け入れ国でもあり今後の人的・物的両面で必然的に交流が盛んになるものと思う。JICAのその国民の心情を害さない配慮に敬服した。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

①発展途上国という認識、それに対する経済大国日本の付き合い方

原油、木材、ゴムそしてコーヒーなど原料輸出国から工業国、観光立国への脱皮や経済格差の是正など多くの問題が山積され、その問題解決には長い時間と努力が必要と思うが、その必要性については少しずつ国民意識が芽生えはじめていると思う。我々日本人はその努力を認め、長期的視野にたって経済先進国としてのサポートが求められているものと思う。

②ODA支援とJICA事業のすすめ方

貧しいものへの救いの手をさしのべる必要性は一応の説明で了解できるかと思うが、世界の平和のために共存共栄が求められ、途上国の政治的安定や経済発展が必要不可欠であることを、またそのために日本人として何をすればよいのか、これから社会人として生きていく若者に是非考えさせていきたいと思う。

また、技術協力を中心とした2国間贈与の部分を担当するJICA事業のすすめ方についても、相手国の心情をよく考えながら個人でも身近に体験することのできる国際協力であることを説明したい。

“草の根協力”として現地評価の高い青年海外協力隊員数は年々ふえて確実に実績を上げているようだ。デンパサールの観光教育訓練センターでお相手してくれた東隊員や村山隊員のはればれとした笑顔が印象的で、ボランティアにはなんらかの“みかえり（自分への利益）”が必ずあるという感じがした。自信をもって生徒に話ができると思う。

③生活そのものを支配する宗教

インドネシア憲法は信仰の自由を認めているが、それぞれの地域ではっきりとした宗教を持っている。ジャワ島ではイスラム教、バリ島ではヒンズー

教。どちらも独特の宗教で特にイスラム教は朝5時半から一回目のお祈りが始まり、一日5回定時にお祈りをする。食べ物を制限し、結婚までも制限される。日本人としてはとても理解できない。しかし、訪れた高校では教育の最重要目標として宗教心を育てることをうたっている。施設の中にお祈りの場所まで設けられている。

災害の少ない恵まれた自然環境の中ではそれぞれの個人を律するのは宗教ということか生徒にどこまで理解が可能か問題をなげかけてみたい。

④生活環境問題の関心

訪問した林木育種センターでの説明で当国カリマンタン島で一年間に80～130ヘクタールの森がなくなっていくという。急速な開発に伴う自然環境の破壊や公害の発生に対する意識がようやく芽生えてきた。木を利用するのはどちらかという先進国。国の人口の7割が住むジャワ島で目立つのがホンダ、トヨタの車とバイク。それら自動車から出る排気ガス。日本人として責任を感じないわけにはいかない。

インドネシア国内でも人口・環境省、環境管理庁の設置など環境行政の枠組みの整備などのほか、森林保全施策の充実がようやくはかられつつある。この分野でも日本の協力が始まっているようだ。誠意をもった対応が要求されるであろう。生徒にとっては環境問題に対しては日本人と発展途上国の人々とは立場上考え方が違うことを途上国の生活を通して教えていきたい。

⑤いろいろな言語への関心

ガイドさんの説明によれば366の種族があり、255の方言がある。ジャカルタでは共通語としてインドネシア語しか話さないそうだ。インドネシア語は日本語に似た発音もあるようだ。国内では英語の通じた所もあった。これを機会にインドネシア語を勉強してみたい。生徒には新鮮な感じで受けるものと思う。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

現地で雨に降られるとスケジュール通りにいなくなるだろうから、向こうの実状からして乾季に実施するのはやむをえないものと思う。しかし期間については短すぎた。中身が見えない。せめて20日から1ヶ月はほしい。

(2) 研修日程および訪問先

かなり強行日程だったと思う。夕方少し早めにホテルにつく余裕がはしかった。訪問先についてはメインストリートばかり通るのではなく庶民の暮らしにもっとふれてみたかった。例えば現地高校訪問は進学校ではなく職業高校とか……。その点では最終日の夕食（露天のレストラン）は団員に好評のようだった。欲を言えば農業科の教員としては農業技術の現場を見たかった。

(3) その他全般的な所感

赤道の国、インドネシアの重い歴史ある3都市ジャカルタ、ジョグジャカルタそしてデンパサールはいずれも民族意識の高い人口が多く活気あふれる町だった。今回それらの視察に参加でき、無事終了したことをうれしく思う。また、JICAの事業内容についても、青年海外協力隊の活躍とその重要性についても自分の目で確かめることができ認識を新たにすることができたと思う。

発展途上国のこの国にも問題は多いが、とにかく「人造り、教育の重要性」が急務であることははっきりとよみとれる。それも含めてアジアの先進国、日本に寄せる期待は大きいものがあるように思われた。アジアという同じ地域に住む、同じ民族として国造り、人造りのお手本になっていることを考えたとき、逆に日本の工業化や開発のありかた、経済倫理や教育のありかたは、これで良いのかと考えさせられることもあり、日々の教育活動にまた新たな視点を見いだした思いがする。

最後になりましたが、JICA関係者及び高国協、新潟県高等学校国際教育研究協議会の関係者にこのような貴重な機会を与えていただきましたことをこの紙面を借りて、心から御礼申し上げます。さらに同行された大橋さん、伊藤さん添乗お疲れ様でした。細部までお世話いただき感謝致します。

以上報告に代えます。

氏 名 新 古 達 也
所属学校 石川県立富来高等学校
担当教科 英 語



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

- (1) JICAの協力活動現場で専門家や協力隊員の生の声を聞くこと。

日本では国際協調や経済協力援助の理念や必要性は理解できるが、協力活動の実状までは伝わってこないのが、今回ぜひ生の声を聞きたいと思った。

- (2) 学校教育の現況視察と若者の活動の現状。

社会や経済発展の基盤である若者の姿や、それを支える教育の現状を知りたいと思った。

- (3) 宗教とインドネシア社会との関連を把握すること。

インドネシアは多民族、多宗教国家であるが、宗教が人々の社会生活とどれだけ密接に関わっているのか。

2. 協力活動現場の視察を通して

- (1) バリ観光教育訓練センター

バリ島南部ヌサドゥアに位置するバリ観光教育訓練センター(BPLP)はインドネシア政府主導による高級ホテル街で350ヘクタールの広大な敷地を有する。この一角にあるバリ観光教育訓練センターがまず我々の目を引いたのは抜群の教育環境であった。全生徒1200人に対し教員220人は生徒6人に教師1人の割合になり、抜群の就職実績と併せて生徒が約7倍の入学倍率をもつものとせざるに殺到する訳である。授業料が他の同等の学校の2倍にもかかわらずである。

次に観光立国とはいえ、日本では考えられないほど産学協同が進んでいることに驚いた。何しろ本校はインドネシア国内にある4つの国立の観光専門学校なのである。2年間の在学中には隣接する有名ホテルでの実習はもちろん、校内では厨房、食堂、日本語を含む語学教育などで質の高いホテル従業員を養成しているのである。

ここではコンピュータ担当の村山さんと日本語を教える東さんの二人の青

年海外協力隊員が文化習慣の壁を乗り越え、小さい頃の協力隊員になる夢を実現した話を聞いて感銘を受けた。

(2) 林木育種センター

ボロブドゥールの仏教遺跡とプランバナンのヒンズー教寺院遺跡を見学した後、ジャワ島中部の古都ジョグジャカルタ郊外の林木育種センターを視察した。日本の無償援助で3年の歳月と約13億円の経費で昨年施設が完成し、平成3年には天皇陛下もお立ち寄りになった程、施設や機材は超近代的で日本にはない最先端の機材もあった。

森林火災、焼き畑農業、伐採などで毎年山梨県の約3倍に当たる約80万ha以上の森林が消滅しているが、今後5年間で440万haの大規模造林を政府が計画しており、ここで遺伝子的に優れた林木種子を研究する中心的役割を担う予定で、大きな期待が寄せられていると感じた。

一方で、少なすぎるインドネシア研究者の数に対して、大きすぎる施設と超近代的な機材を果たして使いこなせるかどうか、の疑問が生じてきた。又、国際的な情報交換の可能性があるのに、コンピュータを始めとする情報処理機器は全て日本製品のオンパレードであった。日本の経済援助は日本の輸出振興と密接に結びついていることを示すことになったが、技術移転が開始されたばかりの今の段階では、日本の技術援助がインドネシアの自然環境保全の一助になるように強く願いたい。

(3) 砂防技術センター（STC）

環太平洋火山地帯に属し、129もの多くの活火山のあるインドネシアでは火山の噴火に伴う土砂災害や地滑りの被害が多発しており、犠牲者の数も多い。ジョグジャカルタ郊外にある「ジャワ富士」と呼ばれるムラピ山は今も噴煙が上がっており、有名なボロブドゥール仏教遺跡はこのムラピ山の噴火による火山灰で1000年間も埋もれていた。

SABOが国際用語となるほど進んでいる日本の砂防技術がジョグジャカルタにあるこの砂防技術センターで活躍している。1982年より始まった、砂防ダムを作る技術者の育成というプロジェクトの目的は成功している。この技術協力により育ったインドネシアの専門家が「第三国研修」と呼ばれる、アジアの他の諸国に砂防事業を啓蒙し、研修会を開催するなど「南南協力」も実現している。

砂防技術の技術移転が成功している一方で、4人の日本人専門家はインドネシア人との関係で約束や時間にルーズで仕事の責任感が希薄である点を指摘していた。しかし、相手を見下さないで「ここは日本ではない。ここでは約束の時間に遅れてもおかしくない」という「郷に入っては郷に従え」の精神が大切であるという専門家の発言に、国際理解の原則を再認識した。他方で、完全に現地のスローペースに合わせると技術者として指導しに来ている存在価値がなくなるというジレンマに直面する苦悩する専門家の姿の一面が見えた。

(4) JICAインドネシア事務所表敬訪問

1987年より日本のODAの最大の受取国であるジャカルタのJICAインドネシア事務所を訪問した。高橋JICA事務所長より、日本の対インドネシア経済援助の現状と問題点を聞かせていただいた。20年前は一人あたりの国民所得が\$50でバングラデシュより低かったのが、日本などの経済協力で現在では\$650になっていること、非同盟諸国の盟主としてインドネシアが他の発展途上国を指導し、「南南協力」が機能していることなど得ることが多かった。

問題点として、①経済援助の90%は全人口60%が集中し、全国土の7%しか占めないジャワ島に集中して、本来援助の必要な他の地域に分配されていないこと。②インドネシアは省庁が多く縦割り行政になっており、援助の実行に時間がかかり、援助の効果がそがれる一要因になっていること。③ジャカルタなど都市部の経済発展に対して、地方では飲料水にも事欠くほど生活水準が低く、貧富の差が激しいことなどが質疑応答で明らかになった。

(5) 現地高校訪問

日本の開成高校に匹敵する進学校「第8高校」SMA8を訪問する機会に恵まれた。SMA8はジャカルタ市内にある国立高校であり、普通の高校の2倍の生徒1900名が学んでいる。インドネシア文部省の方針に従い、①宗教心のある生徒の育成。②技能を持った生徒の育成。③心身共に豊かな生徒の育成を教育目標にしている。次の点が参考になった。

(ア) 進学率向上を目指しており、生徒の約70%が国立大学へ進学するのを目標にしている。国立高校111校、私立高校270校の平均国立大学進学率は15%である。SMA8では日曜日先輩が後輩に受験指導をしている。

(イ) 生徒の1000人は午前中、残りの900人は午後の二部授業にしている。東南アジア諸国ではよくあることだが、限られた施設で多数の生徒に対する教育としてはやむを得ないのかもしれない。

(ウ) イスラム教の国らしく宗教の授業があり、イスラム教の教義に加えて、キリスト教等のことも教えている。校内のヒンズー教徒1名と仏教徒1名は宗教の授業には出ない。校内に礼拝のための小さなモスクも設置されている。

(エ) 暗く非常に狭い職員室、48名生徒でいっぱい教室、教育機材が古く乏しい美術室やL1教室などの特別教室は、日本の水準では遅れていると映る。しかし、おそらく全国では最も近代的な学校の一つだろうし、私には教育を重視し将来の社会発展のバネにしたいという、インドネシアの熱気が感じられた。

(オ) 多い宿題や塾通い等の進学校特有のプレッシャーがあるはずだが、生徒は屈託なく、音楽の授業で飛び入りの我々が歌った「ななつの子」に拍手喝采を送ってくれた。休み時間には校庭で元気にスポーツをしたり遊んだりする若者本来の姿があった。

(6) 専門家・青年海外協力隊員との懇談会

インドネシア滞在中の技術専門家、青年海外協力隊員やJICA職員との三回にわたる懇談会を持った。外交使節団やPKO等の表舞台とは別の、いわば裏方の国際貢献に従事する人々の生の声が聞けたのは有益であった。専門家と協力隊員との待遇の格差などの問題点もあるが、基本的に「教えてやる」というよりも、ボランティア精神を持ち「異文化の人々を理解したい」というチャレンジ精神に富んだ皆さんの努力が真の経済発展と世界平和につながると言える。

協力隊員になるには「やる気と体力」が大切との、バリ島で日本語を教える東純子さんの言葉が印象的であった。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

(1) 私にとっては初めての経験となるイスラム教社会やヒンズー教社会は、日本では希薄化しつつある宗教と社会との密接な関係を考えさせられる良い機会となった。ジャカルタやジョグジャカルタでの朝4時半から始まる一日5回

の町中に響きわたるコーランの祈りの放送。金曜日の午後会社や仕事場で認められている礼拝の時間。バリ島のヒンズー教徒が所得の約30%をヒンズー寺院に寄進することなどは強い宗教心の一端を表していると言えるであろう。

- (2) 一般大衆の交通手段は自転車かバスであるが、ジャカルタやジョグジャカルタ等の都市部ではバイクや車が多く、しばしば交通渋滞が起こっていた。90ccの日本製バイクが一般の人の平均年収の3.5倍。自家用車の95%を占める日本車。あらゆる輸入車に課せられる200%の関税。スターレットクラスの小型車で平均年収の約20年分の価格。これらを総合的に考えても、インドネシアの貧富の格差は激しい。
- (3) 交通法規を遵守する気持ちがきわめて薄い。あらゆるバイク、バス、トラック、車が少しでも隙があれば追い越しをかけてきた。バスに乗っていても大変恐い思いをした。カミカゼドライバーとはインドネシアで生まれた言葉なのか。
- (4) 物売りのしつこさ。観光地やレストラン、それに屋台やバスの中にまで押し掛けてくる物売りの強引さには参りました。よく観察すると、オーストラリア人には一回しか声をかけないが、日本人には買うまでしつこく迫る。値段も定価はなく、交渉すると掛け値の半額以下になることも少なくない。
また、道路で車が止まる時に新聞やジュース等を売る少年や、観光地で土産を売る小学生には、発展途上国の現状とともに日本人にはまねのできない「たくましさ」を感じた。
- (5) 優しいほほえみ。インドネシア人は目と目が会うと、ニコッとほほえむ。日本人はあまり人と目を会わせなく、「眼をつけた」とすぐむ人もいるくらいである。インドネシア人のほほえみは、人間の優しさを思い出させてくれた。
- (6) 工業製品がよく利用されている割には、日本の経済協力はあまりインドネシア人には評価されていないようだ。「STCや林木育種センター等のJICAプロジェクトは一部の地域住民しかわからなくて、一般の人は多い日本車や威張っている日本の商社マンというイメージしか持っていない」という、バスガイドさんの言葉はおそらく本当であろう。第二次世界大戦中の反日感情は潜在的にあり、日本人に対しては友好的だが、「うらやましい」という気持ちが強いようだ。JICAの活動をもっと積極的に広報活動する必要があるようである。

(7) ジャカルタ湾での水質汚染が問題になり、熊本の水俣市から調査団が訪問しジャカルタ湾の有機水銀を調べたことがあった。公害防止策に予算をつけ、法的に公害を規制しないと日本やアメリカ等のたどった道を歩むことになりはしないか。それとも公害規制は先進国で許される贅沢であり、発展途上国はまず第一に経済発展と生活水準の向上を優先するのが当然なのか。私自身にも簡単に答えられない問題である。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

- (1) スライド映写会や授業における途上国、異文化理解、国際交流に関する単元における国際理解教育。
- (2) 課外活動の英語部における私個人の見聞・体験談や、異文化理解に関する活動。
- (3) 高等学校国際教育研究協議会の北陸地区理事会における研修報告発表。

5. 所感および意見

(1) 研修時期、期間および訪問先

7月末に実施された研修は最高の時期であった。一週間の研修はかなりの強行スケジュールであったが、限られた時間と予算内で多数の訪問をこなすには納得のできるものであった。訪問先にJICA施設に加えて、ジャカルタの第8高校が含まれていたのは最高の配慮であった。

日程に関しては、毎日の予定がよく変更になり、正確な訪問予定がつかみにくかった。

(2) その他全般的な所感

「アジアを見ずして世界を知ったことにはならない」という、インドネシア駐在の専門家の言葉通り、東南アジアの良さと現実を自分自身の目と耳で見聞でき有意義な研修であった。

一方において、差し障りのないインドネシアの良い面を中心に見せられた感もある。もっと自由に町の中や人々の活動を観察できる時間が一日や半日あっても良かった。

最後に、日本では観念的にしかわからない国際協力の現場を視察する貴重な機会に恵まれて、国際協力事業団と高国協に感謝いたします。

氏 名 小 原 洋 美
所属学校 福井県立足羽高等学校
担当教科 社会科(地理・現代社会)



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

発展途上国における国民の日常生活とJICAの活動、そしてその具体的内容

- ① できるだけ現地の人々の中に入り込み「生」の声を聞く。
- ② JICAの専門家の人々とできるだけ接し、現場の声を聞くこと。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

○バリ島における2名の青年海外協力隊隊員との懇談会において

言語・生活習慣の違いによる苦勞、その中で明るく地元民に溶け込もうとしている隊員の姿(言葉)は接してみても初めて伝わってきた。

*協力隊員となった動機・観光教育訓練センターになぜ多くの生徒が応募するのかなど参考になった。

○林木育種センターにおいて

バイオテクノロジーのハードの面とソフトの面から話を聞き、80万~130万haにおよぶといわれる森林消失を補うため40種の早生樹種に重点が置かれていること。

問題点として、援助慣れのため反応が鈍い・依存的になりがちであることなど、これからの課題として考えていかなければならないことである。

*育種センター設置位置について

情報産業のため偏ったところではなく、大学に近いことなど参考になった。

○STCにおいて

砂防という言葉が国際用語として認められていること。

*どのような砂防技術がインドネシアで利用されているのかがパネル写真やセンター内の各種模型を見学、説明をしてもらい理解できた。

*また、高校生の「インドネシアは火山が多い国であるが、なぜそのような危険な地域に多くの人々が住んでいるのか」という質問に対し、火山と

土壌、そしてそこに住む人々の生活との関連をわかりやすく説明していただいた。

* S T C 専門家から、上流の砂防ダムが土砂により埋没しても、下流の砂防ダムが土砂を受け止めることにより緩傾斜となり洪水の害を最小限に食い止めるという説明がありとても参考になった。

(2) 疑問に思ったこと

特になし。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

短期間のため表面上しか見ることができなかったのが残念であったが、道路・学校・下水などのインフラの整備を急がなければ国民の生活の向上は望めないと思われる。また路上の物売り、歩道上の屋台など日本の終戦後の状況に似ていた。このような状況と経済・地理的重要性、さらに1億8千万人の人口を抱える国家であるからODAの援助額も最大であることが理解できる。

さらに人材の育成と付加価値の高い産業に移行していくためにODAの中心は社会のインフラ整備・高度産業の育成には民間資本の導入が急務である。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

地理(2・3年次) = 林業の章・開発と保全の章で活用

現代社会(1年次) = 環境の章において活用

福井県高等学校社会科研究会(地理・社会各部会) = 発表予定

下記要約

JICA発行の「地球の明日を見つめて」を利用、日本政府が発展途上国に対する経済開発・福祉の向上などを支援するための援助として、政府開発援助(ODA)を行っているが、その援助理念・援助の始まり・援助の仕組み・援助額などを説明、さらにJICAの役割である2国間贈与のうちの技術協力、特に技術協力については林木育種プロジェクトと砂防プロジェクトの概要について両センターで頂いた資料をもとに説明したい。

さらに高校生に対しては青年海外協力隊及びJICAの専門家にチャレンジするように指導したい。

JICAのキャッチフレーズである「人造り、国造り、心のふれあい」につい

て現地で活躍している青年海外協力隊員の言葉や林木育種センター・STC 専門家の方々との話し合いの中で得られた資料や 8 ミリ VTR・写真などを活用し説明したい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

7月23日～8月1日と夏期休暇期間中であったため国外研修は容易であったが、参加が決定し出発までの時間が少なかった。

夏期休暇前は学期末で父兄会・成績処理など忙しく、8月に入ってから実施していただいたほうが事前調査ができるため良いのではないかと思います。

また期間については出入り10日ととても短く最低1か月の期間を望みたい。

(2) 研修日程および訪問先

言語・生活習慣に慣れる為に1週間程度が必要でその後徐々に行動範囲を広げ、同行者の話を聞きながら地元民の中に入り込んでいく余裕がほしかった。欲をいえばもっともっと地元の人々との接触ができたらと思います。費用の面については、大学の寮や研修センターなどの利用・個人負担等で補ったら如何でしょうか。午前中は大学の先生やJICAの専門家の方々に説明を受け、午後は現場見学や各自の主目的に時間を与えるなど余裕を持った研修ができるのではないかと思います。

各自が主目的を事前に調査し、疑問点を専門家の方々にお聞きすれば、さらに充実した研修になったと思われれます。

研修日程・訪問先を含め日程にゆとりがなく、どうしても表面からとらえることしかできなかったのが残念であった。

(3) その他全般的な所感

最後に、すばらしいホテルで宿泊でき、さらにJICA専門家・職員の皆さんに大変親切にして頂き、とてもよい勉強になりました。

氏 名 熱 田 幸 嗣
所属学校 三重県立明野高等学校
担当教科 数 学 / 英 語



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

日本の援助が、インドネシアの人々の生活に具体的にどのように生かされているのかを JICA の活動を通して視察した。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

プロジェクト方式による協力援助で、まず林木育種センターでは、何と根気のいる内容だと思われたが、将来のインドネシアには絶対不可欠な協力援助である。次に砂防プロジェクトにおいては、もうすでにほとんどが現地に根付いているのに感心したし、ここまで到達するにはどれだけ専門家の方々のご苦労されたかと思うと、頭がさがる思いである。

折しも、今筆を執っている傍ら、テレビのニュースを聞くと、九州は鹿児島で集中豪雨のために土砂崩れで何人もの人が亡くなったと報道していた。ジョグジャカルタの砂防センターで見たあの実験が蘇って来た。

(2) 疑問に思ったこと

バリ島の観光教育訓練センターでは、協力隊員の方々が、現地での様々な苦労と戦いながら協力援助をしていらっしゃることに尊敬しましたが、センターの校長の言葉を聞いた時、本当にバリは将来観光産業だけが頼みの綱で良いのだろうかという疑問に思った。確かに、外貨獲得という意味では一番手取り早いかもしれないが、世界的に不景気になった時はどうするのか。もっと基盤産業をしっかりとしておく必要はないのか。たとえば、民芸品などはりっぱに外国にも通用するものなのだから、また米も三毛作も可能なのだから、エビの養殖なども日本の協力援助でやっていたが、そういう一次産業にももっと力を入れてはどうかといういろいろ考えさせられた。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

インドネシアは、スハルト政権になってから、外国企業の投資の増大、また先進国、とりわけ日本の援助の増大に伴い、インドネシア経済は、建設・製造工業・運輸通信、そして銀行・金融の大きな成長をとげ、また輸出も原油・石油製品・天然ガスを中心に大きく拡大した。しかし、この様な経済成長にもかかわらず、労働人口の6割以上をしめる農業部門、また成長した工業部門でも多くの小規模な零細工業はとり残されたまま、経済的な貧富の格差はいっそう広がりがつある。とくに、華かな都市部の繁栄のかげに、一步奥に入るとカンボン（集落）と呼ばれるバラック密集地があった。これらカンボンでの生活を目のあたりにした時、一体日本はこれまでこの様なカンボンに住まざるをえないインドネシアの貧困な人々のために何をしてきたのだろうか。また今後日本は何をしていったら良いのかを考えさせられた。ただ、JICAの活動が地味ではあるが地域に確実に根付いて成功しているのがせめての救いであった。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

各協力現場からいただいた具体的な援助活動の資料を活用し、日本のODA援助がいかにかインドネシアの人々に生かされているかを生徒に話していきたいと思っている。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

一学期終了直後というのは、時期的に忙しい。とくにクラブ活動を指導している者にとっては、インターハイに向けての練習指導の時期にあたり、参加しにくいと思われる。また、研修期間については適当だと思う。

(2) 研修日程および訪問先

日程は、今回現地移動を航空機を使用したため、朝が早くて、反面空港での待ち時間が多くなり、また時差もありハードでした。

訪問先については、一度は行ってみたいとかねてから思っていたところだったので幸運でした。ただもう少し日程に余裕が欲しかったのと、カンボンも視察したかったのですが、無理だったのでしょうか。ともかく、今回の研修形態はgoodだったと思います。できるだけ多くの教員に、また高校生にま

で研修の機会が与えられ、たくさんの人と交流ができました。その分JICAの方にはたいへん御苦勞をおかけいたしました但……

(3) その他全般的な所感

事前研修が直前であったので、あまり役立たなかった。事前研修はある程度事前にやるべきものだと思う。ただ、上京の費用は2倍かかりますが、その分個人負担しても良いのではないのでしょうか。

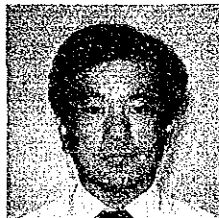
もし、事前研修を今回と同じ様に直前にする場合は、それまでにかなり細かい計画書等が出されていてしかるべきだと思う。今回は、現地とのコンタクトをとりながら計画されていたと思われ但すが、計画の全容等が判らないので、その都度案内をいただいても不安があります。

また、派遣決定通知も6月下旬では少し遅いと思います。各県どこも同じだと思うのですが、教育委員会に研修願いを提出し許可されるまでに結構時間がかかります。私の場合、今回はJICA東海支部のミスもあり決定通知(正式な校長宛のもの)が遅れ、個人的な休みをとって参加しました。費用の面では、今回の様に個人負担があった方が参加しやすいです。JICA丸かかえは、今の時代よくないと思います。その分、今回の様に生徒の費用に回してやった方が良いと思います。

最後になりましたが、JICAの大橋さん、JICEの伊藤さん、たいへんお世話をおかけいたしました。ありがとうございました。

お元気で益々御活躍下さい。

氏 名 談 儀 善 弘
所属学校 和歌山県立田辺工業高等学校
担当教科 数 学



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

私は青年海外協力隊（JOCV）の理数科教師としてネパールで3年7ヶ月を過ごした。この機会にネパールのみならず、南・東南アジアの国々のうちの数ヶ国を旅行・訪問し、それぞれの“お国柄”を感じてきたが、インドネシアは未知の国だったので、この研修に参加するにあたり大きな興味と期待を持ちつつ次のような点を特に注目しようと思った。

- ・インドネシアの生活や習慣はどんなものであるのか、また協力隊の隊員や国際協力事業団（JICA）の専門家など日本の方々がそれをどのように感じておられるのか。
- ・JICA/JOCVは現在どんな活動をされていて、今後どんな関わりをすべきなのか。

2. 協力活動現場の視察を通して

バリ観光教育訓練センターで2名のJOCV隊員にお会いして、バリ島における観光事業の様子や訓練センターのことなどの話を聞いた。観光地において日本語が話せることは給料など待遇が良くなる条件になるという。確かにホテルや店などで、きれいな日本語を話す人にたくさん出会った。円高や金余り現象といわれる現在の日本の状況では、ますますこの国を訪れる人が増え日本語の必要性も増していくと思われるが、そのことばかりでなく日本を正しく理解してもらうために日本語教育をきちんとしていく必要があると思う。協力活動の裏側にあるもう一つの役割を感じた。

林木育種センターの視察で、地球的な規模で森林資源の育成や環境保護が叫ばれるなか伐採することはもちろん植林することにもいろいろな議論があり批判も多い現在、どんな木をどのようにまた何のために植えていくか、ということが重要であることを改めて感じた。結局は切るために植えるのだそうだが、森林の保護というだけではすまされない現実とのジレンマがあることを知った。

インドネシアへの砂防技術の協力は20年以上の歴史があるそうだが、その中心となっている砂防技術センターではレーダーシステムのような最新の機器や技術の導入をはかる一方、簡単に安価でできる“じゃかご工法”の検討を行うなど現地の実状にあった活動がなされていた。センターを見学しても、よく批判されるような最新の日本製の機材ばかりが並んでいるのではなく、地道な協力活動の蓄積を感じた。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

インドネシアに着いてジャカルタ市内に出たときの印象は、落ち着いた雰囲気のあることだった。余裕さえあるように見えた。早朝に体操している人々、休日にジョギングや自転車で汗を流している人々、西洋のクラシック音楽を口ずさむ人、雑誌やマンガの種類が多さ、等々どれも私の知っている他のアジアの国々の中では群を抜いているように思える。そしていろいろな方から話を聞いて、この国がもはや発展途上国ではなくむしろ東南アジア諸国のリーダー的な存在であるという自信に満ちていると感じた。

もちろん私が見てきたのは、大都会のそれもほんの一部にすぎないことは承知している。町の片隅で見かけたスラム街を通して、この国の貧富の差の大きさや地方との格差を想像しなければならない。私が会った日本人は皆、「生活には全く困ることがない。住み心地のよいところだ。」と話されていた。しかし同時に、地方の生活水準はきわめて低く、特に医療の面ではまだまだ援助・協力の必要があることもよく聞いた。また、より進んだ技術を持つ南の国が他の国に指導・協力する、いわゆる“南々協力”が砂防技術をはじめいくつかの分野で行われていて、わが国にもこれに対する側面からの支援を求められている。こうしたことから我々のインドネシアで果たすべき役割はまだたくさんあることを強く感じた。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

インドネシアで見たこと、聞いたことを教室やその他いろいろな場所で話すことは実際に体験した者ならではの教育活動となろう。写真や絵はがき、みやげに買ったものなども興味を引かせるきっかけとなるかもしれない。私は高校の数学の教科書とインドネシア語版『ドラエモン』を授業を行っているク

ラスの生徒に見せたところ、多くの生徒の反応を感じた。特にそれらを使って何をした訳でもないが、生徒は自分なりに何かを感じたのではないだろうか。今後も機会を見つけてインドネシアで感じたことなど伝えていきたいと思っている。

5. 所感および意見

この度の研修において時期および期間については適当であったと思う。今回初めての試みであったそうだが、エッセイコンテスト入賞の高校生と同行できたことも私にとってはある種の刺激であり良い企画だったと思う。日程については我々の希望もできるだけ取り入れて、より実り多いものにと細かい心遣いをいただき感謝しているが、早朝からの移動、また観劇を兼ねた夕食などで夜遅くなり、ホテルに着くと部屋に戻って寝るだけ、という日の多かったことが少々きつかった。JOCV隊員と昼食を共にしたとき、「こんなにおいしい食事を残してもったいない。」と小さな声で呟かれた。そのときは我々もそう思いながら、残さざるを得なかっただけに、申し訳なさを感じながらも辛かった。限られた時間にできるだけたくさんの体験をするという配慮をありがたく思うが、東南アジアを旅するとき悠然と流れる時間を感じることも大事なのではないだろうか。

この研修を機会にインドネシアのことをより深く、また様々な角度から知ろうと思い、いただいた資料以外に次のような文献に目を通した。

『エリアガイド／151 インドネシアの旅』 藤井勝彦著 昭文社

『地球の歩き方29 バリとインドネシア』 ダイヤモンド社

『朝日新聞記者による 特派員の目・東南アジア編』

斧 泰彦著 朝日ソノラマ

『別冊宝島156 ASEAN によろこそ！』 石井慎二編 宝島社

『交換資料集(1992年度)』 ジャカルタ・スラムを考える会編

このほかにもインドネシアを舞台にした小説やノンフィクションなども探したけれど見つけることができないでいる。私とインドネシアの関わりは今始まったばかりであるので、今後もこういったものの紹介をしていただければありがたく思う。

最後に、貴重な体験をさせてもらう機会を与えてもらったJICA並びに関

係者の方々やインドネシアでお世話になった皆様には厚くお礼を申し上げます。
ありがとうございました。

氏 名 飯 島 睦 美
所属学校 島根県立江津工業高等学校
担当教科 英 語



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

最近 J I C A という単語をテレビ、新聞等でよく耳にするようになったことは、その働きに対する期待、その役割の重要性がますます大きくなってきたということを物語るものである。われわれ学校現場に立つ教師は、ともすれば学校という狭い世界の中での生徒との毎日のやりとりで世の中の出来事、世界の動きから離れがちである。しかし考えるにこれからの日本を、世界を背負って立たなければならない若者達を相手にする我々がこのような狭い世界の毎日の雑事にばかり追われていては、島国民族と言われ続けてきた日本人の将来は過去のものと同じようになりはなくなってしまう。私は今回の研修を通して J I C A の行う海外協力の実態を見、前線で行われている日本の国際貢献の現場を生徒達に生の感触で伝えていきたいと考えた。

2. 協力活動現場の視察を通して

協力現場を実際に訪れてみて、まず驚いたのはその規模の大きさと専門家、青年海外協力隊員の熱意である。我々の税金でこれほどの融資が行われているにも関わらず、我々一般人は何も知らない。これは知らされていないと言うよりは、興味、関心を持って見つめていないので目に入ってこなかったこともあるかも知れないが、もっと J I C A 側もマスコミ等を利用してその働きをアピールすべきではなかろうか。実際そのマスコミを利用する費用の問題等があるかも知れないが、我々は日頃、この国際協力、国際貢献の時代に何一つとして役に立てていないと頭を垂れているが、J I C A の行っている協力現場を目にすれば、それなりの自負心も湧いてくるかも知れない。または、今以上の興味を持って国際協力、国際貢献に取り組めるのである。一人では何もできないが、J I C A を通して、こんなにも素晴らしいことができていることを知れば、胸を張って世界の動きを見つめることができるのである。これは、金銭援助のみで満足できると言っているのでは決してない。何かに役立ちたいと強く願って

いても、その方法、手段が分からない国民は少なからず存在するのだ。もっと前線における活動状況などの情報を国民に伝えてほしい。我々国民一人一人が国際協力の輪に入っている意識を持つことができれば、国際協力事業の推進もより容易にはかれると期待できるのではなかろうか。

次に言及しておきたいのが、青年海外協力隊のみなさんについてである。活動現場を訪れ、直接協力隊のみなさんに会えたことが、今回の研修で一番の収穫だったかも知れない。お話していて気がついたのは、協力隊のみなさんは笑顔が素敵で、どの方も初めてお会いした感じがしないのが不思議であった。今思えば、当たり前と言えれば当たり前なのかも知れない。と言うのは、そのように人間味あふれる人たちだからこそ、協力隊として献身的に国際貢献に参加できるのであろう。我々教師は、毎日生身の人間を相手としてすごしている。教師という職業に一番求められているのが、協力隊のみなさんのような人間味なのであろう。生徒を前にして教壇に立つ自分の姿を思い浮かべ、再認識させられた。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

途上国イコール貧しい国、文化レベルの低い国と勘違いしてしまいがちであった自分を恥ずかしく感じた。今回の研修でインドネシアの印象として鮮明に残っているのは、インドネシア人としての誇りを持ち、力強く生きている人々のすがすがしい笑顔である。確かに宗教の問題、気候の問題、地理的な問題と難問は山積されているのではあるが、インドネシアに生まれ、育った人々にとってこれら全ては一種生まれ持った宿命のごとく、それらとともに生きていこうとする姿が感じられた。ここに、インドネシア人の柔軟な哲学があり、ここから彼らの世界観が生まれてくるのであろう。

以上のような特徴を持つ国に対して援助する際、我々は非常に注意して、最大の留意を払って対応しなければならないと改めて思った。相手国をよく理解した上での援助とはよく言われることであるが、そこに宗教が絡んでくるとなお困難な問題となり得ることを実感した。そしてまた、その国の国民達が庶民レベルで本当に求めている援助と政府が国家単位で求めてくる援助とのズレも感じずにはいられなかった。大志を抱き、渡航していった協力隊のみなさんの口から「毎日やることもなく、うろうろしている」と聞かされたときには、シ

ショックであると同時に実際の援助にまつわる困難をひしひしと感じた。ある程度の無駄に終わる援助は仕様がないものの、やはりできるだけフィールドワークを行い、その無駄を最小限にとどめることが望まれる。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

研修期間中に綴ったポケットノート一冊分のメモとビデオを利用して授業等を通じて、ありのままのインドネシアを生徒達に伝えたい。特に現地の高校訪問の際の資料は生徒達も興味を持ってくれると思う。そしてこれらを通して、こんなにも力強く生きている人々もいるのだということをまずは知らせてやりたい。そしてこれを刺激として少しでも協力隊の活動や、JICAの仕事を理解してくれることを期待している。

5. 所感および意見

スケジュール的には大変ハードなものであった。体調を崩し、日本国際協力センターの伊藤さんには大変ご迷惑をおかけした。しかし7泊8日間の短い間に、インドネシアを理解できそうな気持ちになれるのは、やはりこの充実したスケジュールのおかげであったと感謝している。大変素晴らしい経験をさせて頂き、心より感謝している。

氏 名 水 本 正 人
所属学校 愛媛県立大洲農業高等学校
担当教科 数 学



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

人権問題（差別問題）に主眼をおいた。ヒンズー教を信仰しているバリ島では、カースト制度が残っていた。村単位に、バラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラの4階級がある。日常生活では、差別問題があまり表面化しないが、社会的な行事では表面化する。上の階級の人に対して、敬語を使わなければならない。あの美しいバリ舞踊もカースト制度に支えられている。文化と差別が表裏一体の関係にある現実を思い知らされた。異なる階級間の結婚はあるようだが、男がバラモンで女がシュードラの場合、子どもはバラモンになる。また、男がシュードラで女がバラモンなら、子どもはシュードラになるという決りが生きている。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

インドネシアの人たちは、日本人には2つのタイプがあると見ているようだ。「いい日本人」と「悪い日本人」である。前者の代表格が「青年海外協力隊員」。後者の代表格が「商社マン」。（もちろん、「すべての」という訳ではない）現地人と共に生活し、現地人の信頼を勝ち取っている協力隊員。その一方で、にわか上流意識（給料が現地では十倍以上になるから）で現地の人をアゴで使い顰蹙を買っている商社マン（企業マン）。とにかく、商社マンの評判が悪い。数百年支配したオランダ人が尊敬されて、数年支配した日本人が嫌われている。上流意識を持つこと自体は悪いことではない。問題は、身に付いていないマナーであろう。このマナーは、「にわか」では作れない。私たちの教育の有り様を見直さなければならないと考えさせられた。

(2) 疑問に思ったこと

協力隊員の評判が現地でいいのに、隊員の人たちとの交流が話だけで終わったのが残念だ。活躍している現場を見なかった。（話だけなら、日本でも

聞ける) 隊員が現地の人と、どういう遣り取りをしているのか、それを見たかった。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

森林伐採や火山災害など自然破壊につながる環境問題が、世界的規模で提起されている現在、「林木育種センター」や「砂防技術センター」の果たす役割は非常に大きい。日本が、この分野で率先して取り組んでいることがよく分かったし、誇りに思うこともできた。このような取り組みは、継続して欲しいし、そのための援助なら誰もが賛成すると思う。

現地の声として、「日本からの援助が上層部で止まって、国民各層まで届いていない」と聞いた。例えば、日本への留学にしても政府関係者の子弟が占め、成績が優秀でも辞退させられることがあるようだ。これはインドネシアの国内問題だ、と言ってしまうと、それまでであるが、このような不満が積み重なって行くと、排日運動という衣を着た政府批判が起こる気がする。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

現地の高等学校を訪問して、授業や施設を見たのち、現地の先生方や生徒諸君と意見を交換することができたことが、一番ありがたかった。現地の教科書も買ったし、写真も沢山撮ったから、今後大いに活用できる。写真を通して、現地の高等学校の様子や真剣に学習に取り組んでいる生徒の姿を日本の高校生に伝えたい。また、教科書については、日本の教科書と比較研究をしてみたいし、日本の高校生に現地の教科書を当ててもみたい。(現地の教科書の方が、日本の教科書より少し難しい)

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

インドネシアを訪問した者としては、いい時期に訪問させて頂いたと思っている。(時期が乾季で小陰に入ると涼しく、快適な毎日を過ごすことができた) 期間も10日前後がいいと思う。

(2) 研修日程および訪問先

今回もかもしれないが、日程が過密スケジュールで、次から次へと見て回

って終わった気がする。内容を欲張り過ぎている。未消化のまま終わるより、十分に考える時間（ゆとり）を持った方がいいと思う。ホテルに帰ると疲れがどっと出て、その日のまとめを記録することができなかった。

（朝5時起床、夜21時にホテル着）

(3) その他全般的な所感

全体的には、いい研修だったし、このような機会が持てたことを感謝したい。伊藤さん・大橋さん、ありがとうございました。

氏 名 西 森 茂 雄
所属学校 高知県立高知農業高等学校
担当教科 農 業



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今日、日本経済はGNP、対外資産、経常収支黒字、ODAの金額などからみると世界のトップクラスになっている。このような経済大国日本が世界に対して果たさなければならない役割は、今まで以上に大きなものとなっている。発展途上国が政治的安定、経済的発展のために日本と途上国の相互依存のなかで、援助の実態を研修する事が目的の1つである。

また、JICAの役割について現地の専門家や青年海外協力隊員との情報交換で、JICAのインドネシアにおける位置づけ、現地の人々のJICAへの関心等を見聞きし、インドネシアの正確な情報を入手し理解し、今後の職務に活かしていきたいと思っている。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

観光教育訓練センターでの協力隊員の活動が、センターではなくてはならない重要な活動をおこなっている事が理解できた。また、協力隊員のお話では看護婦さんとして協力されている方達が現地の病院ではなくてはならないということもお聞きした。林木育種センターでは、平成4年6月より研究が始まり、早くも成果があらわれてきているとの事、また施設設備がよく整備されている。専門家の方々もベテランの方が多く、現地のスタッフも優秀な方々で、この研究所は結果がすぐに出るというものではないが、地道な研究により森林破壊を少しでもくい止め、貴重な森林資源の保護育成をすすめていただきたい。今後現地のスタッフの指導でのご苦労が大変だと思われるが、インドネシアだけでなく同じ問題を抱えている発展途上国のためにも今後の研究成果が期待されている。

砂防技術センターを訪問し、インドネシアの砂防技術協力は1970年から本格的に始まっており、ジョグジャカルタでは1982年から技術協力が始まっている。

ることをお聞きした。それから約8年間で火山砂防技術について啓蒙普及に務められたとの事である。この研究所は長期にわたっての研究が、砂防技術や気象観測で住民の生命や財産を守る上での貴重なデータを利用し、災害予測や水資源の効果的な活用について、政府の下部組織として現地のスタッフと共に、専門家の方達がそれぞれの課題に対し活躍されている事がたいへんよく解った。

JICAインドネシア事務所の訪問では、インドネシアでの実施プロジェクトが多種多彩な事業をおこなっていることや、専門家、青年海外協力隊の方々が多数活躍されている現状をお聞きしたいへん驚いた。青年海外協力隊の隊員で、大学卒業後すぐ協力隊員として現地に入るには技術的に未熟な隊員が一部いる事をお聞きした。慣れない環境の中で専門家、隊員の方々には今後とも健康に注意されご活躍頂きたいと思います。

第8高等学校の訪問の際、校長をはじめ皆様方に歓迎していただき嬉しく思っている。この学校の生徒は優秀な生徒が多く学んでいると言う事で、授業態度にも表れていると思った。

(2) 疑問に思ったこと

JICAの関係プロジェクトや青年海外協力隊員の関係事業は、皆さんがご活躍され立派な成果をあげておられるが、一部では施設設備に遅れがあるのではと感じられた。第8高等学校では多くの疑問があった。まず施設設備の貧弱さ、PTAの方のお話によると、毎月1回くらいPTAが集まり学校の施設の充実について会合を持ち、お金を集め学校に寄付しているとの事、日本では余り例のない事と思われる。つぎに教室の大きさに対して生徒の数の多さ、1クラス48名いるクラスがあった。また、教室が非常に暗く感じられ、専門教室がなく、音楽の授業を行っているところでは、楽器が設置していない。体育館や講堂的な施設もなかった。グラウンドは狭く、グラウンドの隅には一般の方が営業している店があり驚いた。日本の高等学校と比べることはできないが、やはり施設設備に遅れがあると思われる。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

第2次大戦後の世界経済を規定している最大の要因は、植民地体制の崩壊と発展途上国の登場である。戦後新たに政治的独立を遂げた途上国は、民族経済

を確立し、経済的自立を達成すべく努力を重ねてきたが、過去の植民地の負の遺産は大きく、また先進国を中心とした戦後の世界経済秩序は途上国には不利で、圧倒的多数の国が依然として飢餓、貧困、失業、抑圧、国際収支赤字、債務累計、外資による支配などの諸困難に直面し全体としての南北間の格差は広がりつつある。同時に南北間の格差ばかりか、南部内の格差（南南問題）を発生させている。

今回訪問したインドネシアは、他の東南アジアの国々に比較して生活レベルは高いと思われるが、やはり途上国なりの問題が多いと感じた。首都のジャカルタでも裏町では、生活レベルが低く劣悪な生活環境で生活している人々が多く、子供達が家計を助けてアルバイトをすることが日常的で、東部の島々では原始時代の生活をしている人々もいるという事である。今後先進国はその国にあった援助をし、「持続可能な開発」の理念のもとで環境保全のための技術移転を無償で行い援助していく事が大切である。今回JICAのインドネシアに対する援助現場の一部を研修させていただいたが、みんなが本当に良くやっていると感心させられた。今後とも途上国のために努力して頂きたい。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

インドネシアの現状と、途上国の実状を国際教育という教科を通じて指導していく。ブラジル・パラグアイで教育指導していた教師や、アメリカ留学経験のある教師が本校に勤務されています。その先生方にもご指導頂き今後の職務に活かしていきたい。

5. 所感および意見

- (1) 研修時期および期間は、この時期に行うことがよいと思われる。また期間も適当と思う。
- (2) 研修日程および訪問先は、日程は少しハードであったが現地の実状に合わせ適当と思う。訪問先はもう1ヵ所くらい加えていただけたら良かった。
- (3) その他全般的な所感として、今回高校生が4名同行していたがたいへん良かった。他校の生徒の意見を聞き大いに参考となった。今後も続けて頂きたい。今回の訪問に対し、JICAの皆様にはたいへんお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

氏 名 城 英 巳
所属学校 福岡県立門司高等学校
担当教科 芸術（美術）



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

国際理解教育という点から普通の旅行ではなかなか見られない場所に行けるというところから教育や生活の実状を観察し、考察することを主眼とした。

- (1)日本の教育と比較してどういう現状なのか。また、世界的にはどうなのか。
- (2)インドネシアの教育の現状は、日本の教育現場にどう役立つのか。
- (3)日本とインドネシア間の教科（芸術—美術教育）に関する考察。

インドネシアの教育については、日本と同じ6・3・3制で、大学のほとんども4年制である。1984年5月、7～12歳（小学校）の義務教育制を実施、全国での就学率は、90%を超え、教育熱は高まっている。政府発表による、7～44歳までの文盲率は、8.1%（870万人）で10%台を割った。しかし、地方の農村部などではせっかく入学しても経済的理由から中退する生徒も少なくないようである。学校種としては、

小学校、
中学校、工業中学校、家政中学校
普通高校、工業高校、商業高校、家政高校
師範／体育教師養成学校、国立大学

その他、ジャカルタ、バンドン、ジョグジャカルタ、スラバヤ、メダン等の都市には、アカデミーと呼ばれる各種学校（2～3年）、私立大学が多数ある。

小～高校は、始業時間が日本に比べ1～1時間半早く、多くの学校が校舎不足から2部授業制をとっている。私立の学校も多く、そのほとんどがイスラム系で、マドラサ、プサントレンなどと呼ばれていた。

また、今回は見られなかったが、1984年UNIVERSITAS TERBUKA（UT）と言うテレビを利用した「放送大学」を新設。日本にもあるものであるが、教育機会の平等に努力している。放送は、諸島国家だけに重要で、「パラパ」と呼ばれる放送衛星を打ち上げる事で、ネットワークの全国化が進んだ。放送時間帯は、ジャカルタで平日は、16:30～23:00前後、日曜日は、8:00

～13:30、16:30～深夜となっている。また、ラジオは全国くまなく行き渡っており、ジャカルタには民間ラジオ局が、38局もあり深夜まで放送している。このテレビとラジオの普及により、300種族、約250の言語を持つ多民族国家をインドネシア語にまとめる大きな役割を果たし、現在の統一を支える重要な要素となっている。この技術に関しても日本の協力があったのではないかと推察する。

その他の事については、まだ、思案中である。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

青年海外協力隊の実状を直に視察できた事であろう。青年海外協力隊という言葉は、学生時代から意識していた。アジアの様々な町で見たりしたが、「よく、やるなぁ。」の一言ですませていた。「参加してみたい」とは思ってもみたが、後の人生の保障みたいなものを考えるとどう考えても分が悪すぎる。ボランティアと言えばそれまでだから仕方がないが、それにしても「大変そうだ」の意識が先行していた。しかし、今回のインドネシアでの活動を見る限り、その後の日本での復帰の事は解らないが、九州の離島や僻地でやっているものと比べてもなんだが（沖縄西表の学校をはじめ、九州、山陰の僻地教育を見てきているから比べてしまうのですが）、思ったほど辛いものではないと感じた。逆に過密情報の中、働き過ぎの都市部の日本より、色々な意味で本人の人生にプラスにはなるだろうと考える。ある程度正確に生徒に伝えられそうな気がする。

また、プロジェクト方式の専門家の方々は、本当に自然体で取り組み、日本人としてのアイデンティティを内に込めながらも、まるでインドネシアの風土に溶けこんでいるかのような姿勢での悪戦苦闘している姿を何でもない事のように語るどころなど、感動しました。私にはとてつもなくすばらしく思えました。（民間企業派遣の人たちもこういう気持ちのいい人であるのかという事に関し少し気にはなった。充分以上の待遇でだんだん慣れてくるにつれ、インドネシア人を馬鹿にする傾向がある人がいるとガイドさんから聞いたし、フィリピンなどへ行ったときもそのような事を感じた。たぶん、この種の事はどこの途上国でも起きている事だろうと思う。）

最後に私も同じように国際協力ができるかという事を考えた場合、美術教師にとっては、やっかいなものだと感じた。絵の具代が随分高く、高校の授業でも十分な環境が整備されていないインドネシアでは、十分な制作活動もできず、生徒達にも大変な自腹を切りそうで不安である。実学志向の強い中程度の途上国では純粋美術の教育はやはり難しいのかなと思った。

(2) 疑問に思ったこと

まず、青年海外協力隊が日本の社会に上手く復帰できるかという事である。つまり日本に戻った場合のその後のその人の取扱いがどうなのか、という事である。休職のため、昇進や給与昇級が遅れたりとか、逆に çık かけていく際にも上司等と様々なトラブルがあると言う事もあるときく。徐々にこういう事はクリアされつつあると思うが、それにしても問題が多いと思う。

次に JICA 職員の中にも協力や派遣募集などに関し「自分のノルマ意識の先行」というものがあるかどうかということ。よく日本の ODA はお金をムダ遣いしていると言うような噂もきく。今回の研修ではそういう事は感じなかったが、このことに関しては、まだ、ちょっと見だけなので長い眼でみて考えていきたい。

最後に国際間に対する実利的援助が多いような気がした。納得させる一つの手段に実利で納得させるのはたやすいが、文化や精神の交流が希薄であると日本人というものが単なる技術屋であるという誤解を招いてしまうかもしれない。あるいは、日本経済の下層部のための援助というエゴイスティックな感じさえ受けたりもする。極端に言えば、大企業の尻拭いと言う部分も感じる。だからといって文化の押し売りもよくない。日本から途上国へは文化だと言って、途上国から日本へはじゃばゆきさんだと言ってしまう。だからヨーロッパ植民地時代より悪く言う現地の人もいるのではと思う。JICA とは直接関係ない気もするが、同等の国際交流の土壤に様々な援助、協力があるべきであると考えますが、どうであろうか。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

発展途上国とはいえ、行った場所が場所だったからか、1950年代の日本でも見ているようでそんなに貧しいという意識は感じなかった。産業の発展に関しては、日本が、というより優れた日本人が試行錯誤を繰り返しインドネシアに

寄与貢献している姿はすばらしいと感じた。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

年に一回位であるが、L. H. R.を使い、いままでのアジア諸国を旅して歩いた事やTV番組よりリミックスしたVTRを使ったりして「生き方や在り方を考える」時間を取っている。今回は、その話の中に国際協力という言葉が加わった。そういう視点からの話も盛り込んで生徒に何か考えさせる契機とさせて行きたい。

教科に於いては、今回インドネシアの教科書を手にいれた。この内容等を分析し、日本と比較し、日本で生かせる部分は生かして行きたい。

それと、美術史ジャンルの取扱いは、日本では、ヨーロッパと日本という2つの流れが中心であり、アジア美術に関して語られる事はほとんど無い。そういう紹介を短時間で系統だてたものとなるよう今年度より研究しているが、プランバナンやボロブドゥールの資料が手に入った事も私にとっては大きな収穫であった。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

全体的に充実していた。しかし、もう1日でもとって、ゆっくりと朝の市場や町の屋台を散策したかった。移動の無い3日は、すこし早く起きて1時間程度散策を楽しんだが、庶民の物価を体感するには至っていない。

(2) 研修日程および訪問先

インドネシアで時差を利用し、バリから始めジョグジャ、ジャカルタと移動していったところはよく考えていると感じた。ただ、4時30分起床等という強行軍は、教員だから我慢できた事。ゆっくりと行動するためには、大きく省き、バリとジョグジャだけに絞ったりしてジャカルタは通過だけにしてしまってもよかったかも知れない。

(3) その他全般的な所感

高国協の存在を私が知らなかったのと同様、福岡県では、取り組みも不活発であると聞く。私にとっては当初、中には、あれは実業系高校のものと決めつけてしまう人もいたりして、なかなか本当の事がよく解らない状態だっ

た。（逆に実業系の高校の教師が輪番で行くと言うのなら、それも何かおかしさを感じますが…）

また、私も相当なアジアフリークで、JICAのことは知っていたが、高国協を知らなかったので、ネパールなどで数学を教えている人のVTRを見ると「福岡県の教員には関係ない事なのだろうな。」と思っていた。よくその存在がどこでどうなっているのか上手くアピールされていないだけに一部のマニアックなものしか知らないという感じがします。しかし、私の場合は、今回の研修を通して大体掴めました。どうも有難うございました。

氏 名 権 藤 洋 文
所属学校 佐賀県立佐賀農業高等学校
担当教科 社 会



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

今回、JICAの研修に参加させていただいて、私自身が知ることと「知るべきこと」、生徒へ知らせることと「知らせるべきこと」を強く意識するようになりました。

インドネシアについては高校時代に習った「ジャワ原人」「ボロブドゥール遺跡」「東インド会社」など歴史の切れ端しか頭に浮んでこないほど、教職に就くまでの私は、この国に関して「無知」でした。途上国の中では優等生と言われるインドネシアは私にとって、赤道付近に浮かぶ遠い島国でしかなく、日本人にそれほど関係ないと誤解していたのです。

高校の国際教育研究班顧問となり、たまたま手に取った「エビと日本人」という本が、私にインドネシアの農業・水産業への関心を持たせました。開発（発展）途上国と言われている国々の「開発」を援助することは本当に大事だろうか、「環境保全」との関係はどうであろうかと、好奇心をふくらませ、インドネシア視察に参加させていただきました。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

言葉は手段であって、言葉を使うための思想・考え方が重要だということを感じました。他国で協力活動をしようとする時、言葉を使いこなせることは必要条件であるけれども、「意気込み」という十分条件がなければ、事は成就しないと思いました。バリ島の観光教育訓練センターで協力隊員が「言葉・生活習慣の違いや言いたい事が言えない事」で苦労したと言われていました。苦労されながらも2年の任務を果たし、がんばろうとされている姿、その笑顔には「意気込み」が感じられました。

援助・協力事業は一朝一夕には効果があらわれないようです。現地の人々の協力や理解が得られなければ、援助のメリットが根づかない。ジョグジャ

カルタの砂防技術センターは、長年の日本からのプロジェクト方式技術協力が軌道に乗り、成功している例だと説明を受けました。このセンターではインドネシア人が研究職員として活躍されており、日本の砂防技術がこの地に根づいていることがわかりました。耳慣れない「砂防(SABO)」という単語がそのまま英語となっていて、日本の山々のいたる所にこの技術が使われていることを、はるばるインドネシアまで来て初めて知ることとなりました。

(2) 疑問に思ったこと

バリ島の観光教育訓練センターの校長へ質問できる場が得られ、私たちはインドネシアの観光業の実態について様々なことを聞くことができました。ある先生の「観光業は景気に左右されやすい。観光の外に生きる道は…」という問いに対し、「できるだけ観光で生きていく、今のうちに手工芸産業を育てる」と答えられ、また、「現地の人(バリ島の人々)はなぜ私たち日本人に手を振るのか」という問いには「観光業がメインだということがバリでは共通理解されている」と答えられました。

私はこの答えに不安を感じました。

バリ島はインドネシア観光の中心地で、成田の他、名古屋・福岡とデンパサール間の直行便もあり、インドネシアを訪れる日本人客の大半がバリ島を中心とする旅行客です。

東南アジアの各国は観光産業が外貨獲得の重要な手段であることを認識し、観光振興を国是としています。インドネシアでも1990年を観光年としてキャンペーンを催し、観光客受け入れ体制を整えています。最期の楽園・神々の島と言われるバリ島のリゾート開発は、さらに遡って始められていました。

私が不安に感じたのは、この産業から閉め出されてしまった人々がいるのではないかと考えたからです。

ジョグジャカルタのボロブドゥール遺跡は、歴史記念公園として多くの観光客を集めています。一方、広大な公園化によって土地を失った人々もいるのではないかとこの疑問も出てきます。私たち研修団を至る所で待っていた「売り子」さんたちは、公園化によって周辺へ追いやられた人達ではないだろうか。と疑問と不安はつきません。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

スカルノ・ハッタ空港に着いた時はすでに夜でした。1泊目のホテルへ向かうバスの中から見たジャカルタ市内の路地には、薄暗いにもかかわらず、多くの人々が行き交っており、不思議に思いました。後でわかったのですが、その薄明りには屋台が並び、彼らは夕食をとり散歩をしているということでした。

バスが市内に入ると見上げるばかりのビルが立ち並び、建設中のビルも見られ、まさに「発展途上」という言葉があてはまる光景でした。私の心にインドネシアに対する偏見があったのでしょうか。「信じられない」と思うばかりの建設ラッシュでした。これが「光」の部分だと思います。

翌朝、再びジャカルタ市内をバスで移動している時、ジャカルタの「影」の部分を見たように思います。それは、川べりに並ぶスラム群です。水道も通っていないとガイドさんから説明がありました。この「光」と「影」を、東京・新宿へ帰ってからも見ることとなりました。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

欲を出し、何でも見てやろうという気持ちで参加し、私なりの新「発見」をする研修となりました。スライドやパンフレットは実情を伝えるにはふさわしい教材となると思います。なかでも、バリ島のサン・セット・ビーチで購入した「絵ハガキ」は、日本人観光客とインドネシアとの関係を理解するのに大変役立つ素材となると考えています。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

現地の気候がおだやかで時期・期間ともに良かったと思います。

(2) 研修日程および訪問先

農業関連の援助・協力の現場を見てみたいと思っていました。

(3) その他全般的な所感

国際教育（開発教育）に関してベテランの先生方と視察を同行させていただき、自分の不勉強さが身にしみました。

また、高校生と同じ日程の視察研修でしたので、視察先での彼女たちの反応が参考となりました。

氏 名 中 村 裕 継
所属学校 宮崎県立佐土原高等学校
担当教科 工業（電子機械）



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

私は民間企業に勤務の頃、エンジニアとして海外出張をした経験がある。それは、カナダ・アメリカ等の先進国を企業人としての立場から外国を見るという経験であった。

今回の海外研修は、高校教師として、また国際理解教育に少し関わる者としての立場からの視察研修である。

佐土原高校に勤務することになり、幾度かの海外からの学校視察団を迎える機会があった。そのほとんどが開発途上国からの来訪である。特に、平成4年度国際協力事業団主催による「ブータン・モルディブ教員チーム」の学校訪問を受け入れるまでは、私の顧問をしている国際研究クラブや教科の授業またロングホームルーム等で生徒に紹介するのは、先進国に関するものがほとんどであった。しかし、開発途上国からの来訪が多くなり、それらの国のことを話題にすることも多くなってきた現在、私自身、開発途上国のことを新聞やテレビ等のマスメディアにより間接的に知るのではなく、実際自分の目で見て見聞を広め、直接生徒に伝えていく必要性を感じていた。そのような折、今回の海外研修のお話を頂いたのである。従って、今回のポイントは、自ずと次の点に絞られてきた。

- ① インドネシアの国情を肌で感じること。
- ② 日本はどのようなやり方で、国際協力をしているのか。また真の国際協力とは何かを実感してみたい。
- ③ 国際協力を実践するには、相互に理解することが大切である。どのようなレベルで相互理解を図っているのか。
- ④ 開発途上国への指導・援助の在り方と教育現場における教育的指導・援助との共通点はないのだろうか。

以上のような観点から、国際理解教育にアプローチしたいと思った。

また、教育課程審議会答申の学習指導要領等の改訂の趣旨に「国際理解を深

め、我が国の文化と伝統を尊重する態度の育成を重視すること」とあり、それを踏まえ、新学習指導要領に「個性豊かな文化の創造と民主的な社会及び国家の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献できる主体性のある日本人の育成」と述べられている。このことから、国際理解教育は、その目標達成のための一翼を担うものであり、この研修の成果を学校教育の中に生かしていきたいと思っている。

2. 協力活動現場の視察を通して

前述の観点より、参考になったこと、疑問に思ったことを述べる。

(1) 参考になったこと

バリ観光教育訓練センター、ジョグジャカルタの林木育種センター、砂防技術センター等における国際協力また指導援助の在り方として、発展途上国自体を主役として、日本は黒子に徹しているという点である。これは、教育においても同様で、生徒があくまでも主役で教師はそれを指導・助言するという点で共通している。また、指導援助方式としてプロジェクト方式技術協力等いろいろ参考になる点もあったが、ここでは詳述しない。

(2) 疑問に思ったこと

ODAの資金の流れや問題点は理解できるのだが、JICAそのものの組織構成で、外務省や地方自治体との関係や、職員採用方法等で若干不明確な点が残った。

3. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

今回の視察研修において、JICA関係者をはじめ、様々な人々との出会いがあったが、それらすべてが、TPOに応じて活用できる素材であると考えている。特に、ロングホームルーム、国際研究クラブ等において、写真や頂いた資料は有効に活用できるものと思っている。また、副次的に得た事もこれからの生徒の進路指導に役立てることができると確信している。

4. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

インドネシアは乾季の時期でもあり、期間とも適当であったと思う。

(2) 研修日程および期間

フライトスケジュールが急に変更になったのは、少々戸惑いを感じたが、訪問先の選択は、短期間で効率的にインドネシアの国情や協力活動の視察ができたと評価したい。

(3) その他全般点な所感

ジャカルタの高校訪問で、大変な歓迎をして頂いたわけであるが、その折、校長先生から、日本での教師の地位はいかかなものかという質問を受けた。インドネシアにおける教師の地位は、我々が考えているほど良くないそうである。国民の教育レベルがその国の発展に大きく影響を与えることは衆知の事実でもあり、教育に携わる有為な人材の確保が必要であると感じた。

最後に、今回このような企画をして頂いたJICAの方々、また終始同伴されいろいろ便宜を図って頂いた大橋氏、伊藤嬢に心からお礼を申し上げます。

氏 名 稲 嶺 英 一
所属学校 沖縄県立南部農林高等学校
担当教科 農 業



はじめに（オリエンテーションより）

(1) 開発途上国の現状

豊かな「北」、貧しい「南」と言われている。世界の人口 52.9 億人の内開発途上国には 77.3%、先進国 14.5%、その他の国には 8.7% の人々が住んでいるのに対し、世界の GNP 21 兆ドル（1989 年）の内訳は開発途上国は 19.2%、先進国は 72.4% を占めていて経済的格差は依然として大変大きい。

教育水準も先進国に比べ低く、識字率は男子で 84%、女子 62% である。平均寿命も 60 歳である。

(2) わが国援助の基本理念

① 人道的道徳的配慮

今なお発展途上国では、飢えや病気で幼くして命を落とす子供たち、十分な食事を得られない人々、教育を受けられない人々、劣悪な住環境に住まざるを得ない人々等開発途上国に暮らす多くの人々は厳しい現実の中にある。

② 相互依存の精神

世界経済の中で先進国も開発途上国も密接に結びついており、途上国の政治的安定、経済的発展なくしては先進国の発展もけっして順調ではあり得ない。

③ 環境配慮

近年、地球環境問題への世界的な関心が高まっており、森林破壊や土壌流出、砂漠化、大気汚染など開発は常に環境に影響を与える可能性を持っている。

開発は環境を損なうことがないように配慮しつつ進めていくことが、結局は持続的な開発を可能にする。

(3) 日本の援助の特徴

① 要請主義（相手国の要請にもとづいて行う）

- ② 有償資金協力の比率が高い。
- ③ アンタイドの比率が高い。
- ④ アジア地域を重視
- ⑤ インフラストラクチャー整備（産業基盤整備）
- ⑥ 技術協力の増加

1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

- (1) JICAが実施している国際協力の現場視察（専門家及び協力隊員の活動状況、無償資金協力による施設）
- (2) インドネシアの産業・社会事情の把握
- (3) インドネシアの学校教育（高等学校）の現況視察

2. 協力活動現場の視察を通して（参考になったこと、疑問に思ったこと）

- (1) 観光教育訓練センター（バリ島）……協力隊活動現場視察

私達研修団一行は、7月26日最初の協力活動現場の視察研修で、観光教育訓練センター（DPLP）を訪問しました。そこでは青年海外協力隊員の東さん、村山さんの出迎えを受け、校長先生からセンターの概要説明、質疑応答の後施設見学をした。

DPLPは、生徒数1200名で2年、3年、4年コースがあり、2年コースでは客室、フロント、会計、レストランサービス、調理師の養成を、3年コースではツアー、ホテルマネジメントの養成、3年コースでは更にホテルアドミニストレーション（管理職）の養成を行っている。卒業後はホテルや観光関連企業に100%就職し、インドネシアの人材育成に寄与していると校長先生は話していた。

協力隊員の東さんは日本語を、村山さんはコンピュータを教えていますが、教科書は自主編成で苦勞も多いが、生徒が喜んで授業を受けてくれるので苦勞のしがいがあると笑顔で話していた。

観光客の3割は日本人で占めていて、これから後もさらに日本語の話せる観光産業人の育成を充実したい、両隊員の熱心な取組みには感謝していると語る校長先生。参加の動機を「他の人達の役に立つボランティア活動は無いものか」と思い協力隊員に参加した」と話していた両隊員の活躍ぶりを頼もし

く思うと同時に始めてわが国の国際協力の現場を見ることができて大変感動した。

(2) インドネシア砂防技術センター

砂防技術センターでは、チームリーダーの仲野さん、調整員の徳丸さんから事業所の説明をうけた。同センターはプロジェクト方式技術協力で、第一期目のプロジェクトは1982年から1990年までの8年間で、インドネシアで最も問題となっている火山砂防を対象としたもので、この間に500名の技術者の研修や現地に適した技術の開発・研究がなされ、火山砂防技術の啓蒙普及に寄与している。1992年から5年間の予定で新しいプロジェクトがスタートし、火山砂防から総合的な土砂災害にたいする一般砂防へと拡大し、日本からはJICA派遣長期専門家として4名の専門家が加わり技術指導を行っている。

インドネシアが日本と同様に火山の多い国であることを現地を訪問して初めて知った。そして日本の進んだ砂防技術が外国で活かされていることに感心した。さらにこれまでの技術協力で育ったインドネシア人スタッフが中心になり他のアジア各国から年間15人程度研修生を集めて「第三国研修」を実施し砂防事業を周辺のアジアの国々に啓蒙普及しているとのことで、日本の国際協力事業は一国のみにとどまらず他の国々まで広がっていくことを実感し感動した。

「砂防」と言う用語は「SABO」として世界に通じる専門用語になっているとのことである。

(3) 林木育種センター

「インドネシア共和国の総面積は192万 km^2 で日本の約5.2倍であり、そのうち森林面積は国土の75%を占める世界で有数の森林国である。しかし、森林火災、焼き畑、伐採などによって毎年80万ha~130万haの森林が消失している。山梨県の2~3倍の森林が毎年消失している。」チームリーダーの田畑さんの説明に、こんなにも膨大な面積の森林が毎年消失しているのか、と大変驚いた。

林木育種センターは1989年無償資金協力和技術協力の要請を受け、平成2年から協力を開始し130億円の経費をかけて建物と機材、設備の整備を行い平成4年6月には完成し、日本から5名の専門家も着任し本格的な協力活動を行っている。

施設見学は橋本さん、立仙さんの案内で回った。各研究室では現地の研修生が自信に満ちた様子で一生懸命に説明していた。

センターでの技術協力として現在取り組んでいる課題は①種子源の開発、造成及び評価手法の技術移転、②増殖技術の開発、③有料種子源の材料及び情報の提供のための体系化作り、④林木育種事業に関わる助言であると専門家の方々は話していた。

地球的規模で環境破壊が進む中、林木育種センターの事業は時代のニーズに合ったプロジェクトではないかとおもう。専門家の先生方の活躍とプロジェクトの成果がインドネシアに根付くことを願っています。

(4) 国立第8高等学校訪問

私達研修団が訪問した時は、午後の部の授業が始まっている最中であった。校長先生はじめ多くの職員・父兄に出迎えていただいた。

会議室で休憩したあと早速、先生方の案内で授業参観をした。生徒の授業態度は真剣そのもので、或る教室では活発な討論が行われ、数学や国語の授業をしている教室では、一生懸命問題に取り組んだり、先生に指名されると喜んで前に進み出て黒板に板書をする生徒、とにかく学校全体に活気があり生徒の真剣な眼差しが印象的であった。

学校は小学校・中学校もそうであるように、午前の部と午後の部に別れて授業を行っていて、生徒数は、午前の部が1000名、午後の部が900名、合計1900名の生徒が在籍している。又施設は図書館、コンピューター教室、物理教室、語学教室が完備され日本の高校とそう遜色のない状況である。インドネシア全体では、国立高校が81校、私立高校が270校あるとのことでしたが、1億8千万人の人口で高校数が351校では、高校の絶対数が足りないと思った。

校長先生の話のなかで学校の教育目標は①宗教心を育てる、②技能を身につけさせる、③心身共に健康な生徒を育てるとあった。南国特有の屈託のない明るい笑顔、授業を受ける真剣な眼差し、施設を誇らしげに案内し説明してくれた生徒の姿に、インドネシアの将来は明るいなど痛感した。

(5) JICAインドネシア事務所表敬訪問

高橋所長より対インドネシア技術協力及び無償資金協力実施概要の説明を受けた。

技術協力では、研修員受入れ589名、専門家派遣564名、青年海外協力隊72名でインドネシアの人材育成及び技術移転に力を入れている。資金援助は12～13億ドルで90%が有償、10%が無償である。

懇親会では、ジャカルタ近郊から専門家や青年海外協力隊の皆さんが参加して現地のような活動の状況について知ることが出来た。

家族で赴任している専門家、単身赴任している協力隊員、多くの人達が日本の国際協力に貢献している事を目のあたりにして敬意を表した。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

短期間の研修で国全体の実情を掴むことは難しいが、川沿いのスラム街、観光地での物売りの状況や、現地のガイドの話などからまだ貧しい人々が多いと言うことは言えると思う。これからも日本の援助が必要だと実感した。

わが国の現在行っている援助については、砂防技術協力は1970年から本格的に始まっていると言うから長期にわたって技術協力事業が行われている。技術移転もだいぶ進み、今では第三国研修もインドネシアのスタッフで行われるようになった。「国づくりは一朝一夕で出来るものではない」この事は皆が承知していることであり、砂防技術センターは火山災害や土砂災害から国民の生命財産を守り、援助理念の人道的・道徳的な面、また環境配慮の面からも援助が成功した良い例ではないかと考える。

林木育種センターもあと2年でプロジェクトが終了するという。森林破壊が進行している現在、継続して第二期のプロジェクトを組み援助を強化する必要があるのではないかと感じた。

インドネシアに於ける1993年実施中のプロジェクトを見ると農業省、公共事業省、保健省、商業省、教育文化省、その他あらゆる省庁にまたがって行われており大変すばらしいことだと思う。第2次大戦後、廃墟の中から日本が驚異的な復興をなし遂げ、現在の経済大国になったのも教育水準の高さのおかげだと言われる。「教育は百年の計」ともいわれる。欲を言わせて貰えば学校教育への援助も長期的に行えれば尚よいと思った。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

研修中に撮影した現場訪問や観光で訪れたインドネシアの文化遺跡等をスライドにして協力隊や専門家の活動状況の報告会をもちたい。

又、本校は高等学校国際教育研究協議会の事務局校でもあり研究協議会や総会等を利用して発表もしたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

研修時期：夏季休暇に入って直ぐ行われたので良かった。

期 間：10日は必要。

(2) 研修日程および訪問先

研修日程：移動日は午前4時～5時の起床はきつかった。

現場視察は1日1ヵ所にすれば、ゆとりが持てるのではと思う。

訪 問 先：適当であった。高校訪問があつて大変良かった。

(3) その他全般的な所感

エッセイコンテストで入賞した高校生と一緒に楽しい研修が出来たと思う。

タイ班日程

月 日	日 程		宿泊ホテル名
	午 前	午 後	
8.21(土)	11:00 東京発	15:30 バンコク着	アンバサダーホテル
8.22(日)	08:30 バンコク市内見学 水上マーケット ワット・アルン他	12:00 バンコク市内見学 ウィマンメーク宮殿 大理石寺院	同 上
8.23(月)	10:00 JICAタイ事務所表敬 11:30 アジア工科大学視察	12:00 アジア工科大学視察	同 上
8.24(火)	10:00 ワット・トライミット 高校視察	12:00 ワット・トライミット 高校視察 14:30 家畜衛生生産研究所プ ロジェクト視察 19:00 JICAタイ事務所主催 懇親会	同 上
8.25(水)	09:50 バンコク発 10:50 チェンマイ着	13:30 チェンマイ大学工学部 青年海外協力隊電子機 器隊員訪問 15:30 チェンマイ職員養成大 学 青年海外協力隊日本語 教師隊員訪問 19:00 派遣団主催懇親会	ノボテルスリウォン ホテル
8.26(木)	09:00 チェンマイ市内見学 ラン園、象の訓練所	12:00 チェンマイ市内見学 ドイステーブ寺院 ブラシン寺院	同 上
8.27(金)	09:00 チェンマイ発 10:25 バンコク着	15:00 環境研究研修センター プロジェクト視察	グランドパンフィック ホテル
8.28(土)	10:00 ラヨン水産資源研究開 発プロジェクト	12:00 バクヤ市内見学 バクヤロン島	同 上
8.29(日)	08:00 バンコク市内見学	12:00 バンコク市内見学 23:30 バンコク発	機 中
8.30(月)	07:30 東京着		

氏 名 千 葉 大 健
所属学校 宮城県立仙台東高等学校
担当教科 社 会



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

長年、国際教育、特に開発教育の推進にかかわってきましたが、特に、高校生を中心とした青少年の目を開発途上国に向けさせることに力を入れてきただけに、途上国とはいいながら、NIE Sの代表的な国のタイの現況を直接見れたことは収穫でした。

特に、教育関係の現場（大学・高校）を視察できたことは、通常なかなか見れないのでよかったと思います。

また、長年、「宮城県青年海外協力隊を育てる会」の中心役員として、協力隊活動の普及啓蒙にあたってきただけに、タイにおける隊員の活動を見聞できたことは、これまで見た他国と比べる上でもよかったと思います。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

「百聞は一見に如かず」ですべて勉強になりましたが、特に、バンコックの大気汚染がひどいと聞いていたので興味をもって行きました。しかし、新設の環境研究研修センターの意欲的な活動ぶりを見て、今後の客観的なデータの提供と助言が、その改善に大きく役立つようなので期待したいと思いました。

また、教育現場のチェンマイ大学工学部、チェンマイ教員養成大学では、直接、教室および学生の授業風景を見ることができ、ワットライミット高校と同様、資料だけではわからない部分をつかめてよかったと思いました。

また、各プロジェクトで働いている専門家の方々の開拓者精神にあふれた取り組み姿勢に感動すると同時に、カウンターパートをいかに育てるかに苦心している様子もよくわかりました。新しい技術がその国で定着するためには、現地の人達にいかに理解させ、習得させるかにかかわっているだけに、異文化の技術者達が、双方の立場で現状を観察できる能力が必要です。それ

だけに、その占める位置は重要であることを改めて感じました。

(2) 疑問に思ったこと

JICA機関や各プロジェクトで働いているカウンターパートや職員の日本に対するイメージや意見、生活ぶりなどをできれば聞いてみたかったと思いました。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

コロンボ・プランに始まった日本の援助は約140ヵ国も対象とし、ODAの実績も他に類例のない伸びを示しており、国民の関心も非常に高まっています。そして、それは同時に、国民の血税が本当に効果的に使われ、喜ばれ、日本の信用創造に役立っているのかという疑問と期待の重なった複雑な感情にもなるわけです。国内の充実しなければならない部面をけずってまで、先行投資しなければならない日本のおかれている国際的立場を国民に理解してもらうことが必要なだけに今回のような、生の姿をみた者が積極的にPR役をやる必要があると思います。その意味において、教育現場にいる私達は、伝播力が大きいわけで、十分自覚して大いに啓蒙活動にあたるべきであると思います。

それにも増して、技術協力は、受け入れ国の要請と援助国の現状をよく踏まえた協力が一致しないと、期待した効果があがりにくいわけですから、資金・機材だけでなく、人造りがポイントになるわけです。その辺の苦心がタイでも随所にみられました。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

収集した資料・スライド・写真を活用し、授業はもちろん、県内外の教員・生徒対象の各種研究会、国際教育関係の研究会などで報告し、啓発を深めていきたいと思っています。

また、私の深くかかわっている「宮城・フィリピン青少年交流事業」や「タイ青少年招へいプログラム」、「宮城県青年海外協力隊を育てる会」などを中心に、「最も近く最も大切な隣人はアジアの人々」であることを地球社会教育、開発教育の視点で広く学ばせていきたいと念願しています。

国際教育の勧めは、ややもすると、「脱亜入欧」「英語圏教育」になりがちであり、日本の言動が「欧米寄り」を指摘されている折、経済・文化大国とし

て国際的に説得力あるリーダーシップを発揮するために何をしなければならないのかは自明なわけですから、「世界をみつめよう」「翔ぼう、世界のステージへ」を合言葉にもっと強く開発途上国への視点を大事に教えていきたいものです。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

ちょうどよいと思います。

(2) 研修日程および訪問先

結果的に、タイ1国だけになったことが、タイを北部、中心部、東南部と3地域見ることができ、よかったと思います。

ラヨン水産資源研究開発プロジェクトが、時間の都合上、全くのかけ足で残念でした。

(3) その他全般的な所感

限られた日程の中で、多くのプロジェクトを見聞でき、よかったと思います。

参加者の数が少し多すぎたようで、情報交換が十分行なわれなかったのは残念でした。一考を要すると思います。

6. その他(「高校教師海外研修」のあり方について提言)

現行の研修は、過去大きな足跡を残してきておりますが、これの見直し、続行、改善と合わせて、できれば次のようなやり方も検討いただければ幸いです。

高校教師海外研修に参加した教師、高国協で活躍中の教師、教科関係の教師、宮城県高国協などでは、次の意見があります。

JICA事業についてある程度、理解し、その啓蒙に尽力されている先生、さらに各自の専門教科・担当クラブを中核に開発教育の推進に役立ちたいと考えている先生は結構おります。そういう先生を対象に、毎年1回位企画していただければ、一部補助と現地便宜供与によって、さらに勉強の深まりと斯道振興の意欲を喚起することになると思います。というのも、過去の研修参加者の中から、①他の途上国の実情を見聞したがっている先生が多数いること、②JICA事業や高国協への理解・協力に、府県の格差が大きく、話がかみあわな

いこと——などをよく聞き、ある意味では、別のやり方があってもよいのでは
と思い、このことを一案として考慮していただければ幸いです。

具体的には、県またはブロックに補助金をいただいて企画する方法、中央で
企画する方法など、いろいろ考えられると思います。

前向きに、ご検討いただければ幸いです。

氏 名 佐 藤 勇 一
所属学校 秋田県立能代北高等学校
担当教科 英 語



1. 今回の視察に際して、特に主眼をおいた点

英語科設置校において、国際理解教育の一翼を担っている者ですが、これまで英語教師として英語文化圏に目を向けがちでした。それ以外の国々特に発展途上国の国々について、これまでは特別研修の機会もありませんでした。この度の研修に加わるよう推薦をいただき、願ってもない機会となりました。現地の人々の生活の様子を実際に自分の目で見ること、その背景となっている文化に触れて、それを appreciate すること、できるだけ多くの現地の人達と直接対話をして人と人との触れ合いのすばらしさを実感することなどを心がけました。一方日本の援助について、その必要性と現状、タイ国の人々の生活に対しての寄与の度合いなどについて客観的な知識を得ること、専門家、協力隊員の姿勢や活動の内容から一人の国際人としてのありようを学ぶことを主眼として参加しました。

2. 協力活動現場の視察を通して

(1) 参考になったこと

専門家、協力隊員、その他の方々のお話を通して、タイ国が援助を必要としている実態、タイの人々のくらし、物の考え方などについてかなり具体的な知識を得ることができました。

(2) 疑問に思ったこと

東南アジア諸国の中ではもっとも発展している国の1つであるタイ国になぜ援助が必要なのかという疑問を持っていましたが、周辺諸国の中核の国を援助することで、周辺諸国への間接援助の役割もあるのだということを理解できました。

3. 途上国の実状および途上国援助に関する感想について

訪問当初、直接目にしたり、いろいろな方々から話を聞いたりすることで理

解した現在のタイ国の経済上の、また生活環境上の遅れた部分を、我が国の実態と比べて30年前の状態であるとか、いや40年前の状態であるなどと考えて理解しようとしたが、そのうちに国情の一側面を取り上げたとしても必ずしも同じ尺度で計ることはできないということに気がつきました。つまり問題は発展の速度であって、条件を整えば遅かれ早かれ同じような経過を辿って先進国に仲間入りするのだと楽観的に見ていたのですが、こうしたことは必ずしも正しいことではないと思いました。それぞれ固有の歴史、国民性があるわけで、これまで先進国が目指したゴールを様々な途上国にそのまま当てはめていかどうかは疑問だということです。その点途上国からの要請が先にあって、援助の方法が検討されるProcedureを大事にしているということを知り、ODAに対する疑問や批判の一部に対して答えを得ることができました。

現地の人々について、援助に携わっている専門家や協力隊員がよく口にしていた国民性の違い（「ペースの違い」と言っていた）から来る援助活動のご苦労をうかがうと、援助の難しさを感じるばかりでなく、人間にとって何が幸福な状態なのかということまで考えさせられました。先進国の中でもさらに先を行く日本に住んで、今のような暮らしをしていることが本当に幸せなことなのか改めて振り返って考えざるを得ませんでした。ただ都市化や工業化による環境や衛生面悪化は地球のどの地域でも人類が克服しなければならない問題点で、当事国に力がなければ他国からの援助が急がれる部分だと思いました。人間が人間らしい暮らしを享受する権利は不変のものだと思うからです。

4. 今後の教育指導に活用できる素材や活用の具体的方法について

①タイ国の人々に対する理解

直接目で見ただけの様子、専門家や協力隊員の話を通じて知り得た人々の生活や考え方、現地高校訪問やチェンマイ教員養成大学訪問の際知り得た教育の実態、その他現地の人々と直接対話をして知り得た国民性などは高校生にタイ国の人々を理解してもらう上で大いに有効な素材となると思います。

②タイ国の文化に対する理解

寺院や宮殿などの文化財、ラヨン、パタヤなどの海岸、機内やバスから見た農地の様子、民芸品などを通してかいまみた山岳少数民族、食文化など、写真等を見せることで高校生の理解を得たいと思っています。

③日本の援助の様子

各プロジェクトごとに援助の必要性、目指す成果について専門家や協力隊員からうかがってきた内容を正確に具体的に伝えたいと思います。

授業でわずかな時間をみつけて話すことを心がけているほか、10月7日～8日に開かれる秋田県高等学校国際教育研修会で講演をするよう要請されています。また10月発行の本校学校新聞に投稿、またはインタビュー記事の形で報告するよう求められています。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

東北、北海道の一部の高校は夏休みが短いので、もう少し早い時期であれば授業への影響が少ない。本校の場合8月23日に始業式があったので、1週間ほど授業が欠けました。このようなプログラムで1国を訪問するには今回の期間で十分と思います。

(2) 研修日程および訪問先

2日ほど渋滞に巻き込まれてホテルに帰る時間が遅くなったが、それを除くと無理のないスケジュールでした。現地高校が訪問先に組み入れられていたことはとても良かった。生徒や教職員の心あたたまる歓迎ぶりに恐縮したが、こちらでそれに答える準備をして行かなかったのが大変残念に思いました。せめて図書など、おみやげに持って行ったらよかったと思いました。大学、研究所の訪問が多かったが、協力隊員で農村などで苦勞して援助活動をしている方々の訪問もしくは我々の夕食会への招待などの企画があって、交流ができればもっと良かったと思いました。

(3) その他全般的な所感

この度秋田県国際教育研究協議会の推薦をいただいてこの研修に加えて頂き、貴重な経験を得ましたことを各方面に感謝しております。1で述べたような当初の課題についても満足の行く結果を得ることができました。今後機会があるごとに途上国について生徒と一緒に考えていきたいと思っています。

氏名 多田裕志
所属学校 聖光学院高等学校
担当教科 宗教



新しい価値観の創造

ここバンコックは近代化の嵐の吹き荒れている大都市。人口600万人、街は車でゴッタがえしている。日本車が9割方をしめ、交差点に立つ交通整理の警官は、マスクをしている。排気ガスが多いためマスクをしないで立ちつくすことが難しいとのこと。

私は冷房の完備された大型観光バスに乗っている。このバスは外国人用の観光客用のバスである。バンコックの一般の人は窓を開けた大型乗合バスに混み合いながら乗っている。

バスの窓から街をながめていると、道路側のいたるところで食事を作って売っている人、又食べている人がいる。俗に言う屋台と出店。決して清潔だとはいえないところで食事をしている。汚れたようなテーブルに座っている人。その周りには犬も猫もいる。又道端の日陰で赤ちゃんが眠っている。

しかし、目を遠くに転じてみれば、超高層ビルの建設ラッシュや高速道路の建設。超高層ビルは豪華なホテルや分譲マンションとのこと。ガイドさんの説明によると豪華なホテルを利用する人は日本人。また、分譲マンションを購入するのも日本人とのこと。

聖なるメナム河

翌朝、今度はメナム河の水上舟に乗る。水上市場、メナム河周辺の家々を見る。この河も私たち日本人の感覚から考えれば、清潔だとは言えない。鼻をつく匂いもきつい。しかしながら、ここで生活する人々にとっては聖なる地域であり、母なる恵みの河である。この河が生活の源である。炊事、洗濯、沐浴、水遊びと限りない恩恵の河である。そして生活にとって、最も必要な塩が河上(上流)より船で運ばれてくるとのこと。何と便利なことであろうか。

人類は古代より河のそばが最も適した生活の場である。そこに文明が起こり、文化が発達したのである。そして、今日メナム河周辺に立ち並ぶ家々にも、冷蔵

庫、洗濯機、扇風機が入っている。近代の物財中心主義の価値観は全人類が通過しなければならぬことなのであろう。

近代化の嵐が吹き荒れる中で、先進国に育った私たちは途上国の人々より少し早く物財の恩恵にあずかった。

満員バス地球号

かつてケネス・ボールドウィングは「宇宙船地球号」というキャッチフレーズを提唱した。だが現実の地球はこの言葉から感じるほど整ったものでもない。むしろ継ぎはぎだらけのオンボロバス、それも不平等な満員状態だ。人類の長い歴史でいえば、ほんの一瞬早く近代化路線に乗り込んだ8億人だけがエアコンディションの利いた前部座席を占拠して「豊かさ」を満喫しているが、その数倍の人々はスリ詰め状態で立ったまま、かなりの数が車体の外に辛うじてぶら下がっている、といった有様である。

このバスを「近代」という道路に走らせてきたのは前部座席の8億人、つまり先進国だ。彼らが働かなければ「満員バス地球号」は立ち往生、後部の乗客が窮屈な姿勢で立ち続けなければならない。

だから、先進国の8億人が安楽と豊かさを享受する権利を主張するのも故なきことではない。彼らは、このバスを動かす運転手であり、車内の秩序を保つ車掌でもある。それにふさわしい知識と腕力もある。過去200年にわたって先進国は国際秩序を定め、それを軍事力で保ってきた。今、先進国が問題にしているのは、満員になり過ぎた立席から人いきれが流れ込んでくる環境の悪化と、こっそりと座席の間に割り込んで来る移民である。だが、内心で恐れているのは立席や窓の外にぶら下がる人々が座席に殺到して車掌の力でも抑え切れなくなることだ。

そんな満員バス地球号が今、20世紀末に交差点に来た。真っ直ぐ進む道は舗装された上り坂、近代化路線の継続だ。一見楽しそうには見えるがその先には、絶壁の高山がそびえている。路肩だけ見ている運転手は「良い道だ」というが、先見性のある人々には遠方の絶壁を指して警告を叫んでいる。

左に折れる道は花と緑の美しい未舗装の下り坂、行く先は深い谷間で見通せない。人道主義者や環境論者は、その景色に惚れ込んで左折を要求している。少々揺れが激しくともスピードを落とし、座席を詰めてみんなが座れるようにすれば行ける、というのだ。彼らは善意なロマンチストだが、立っている者の数やこの

バスの機構をよく調べていない。近代化路線を疾走するように作られたこのバスは、いったん下り坂に入ると安易に戻れない。運転手や車掌がやる気を失えば事故騒ぎの危険もある。車内には民族紛争や飢餓貧困という危険物も積まれているし、燃料、部品にも限りがあるのだ。

やさしい情知の飛躍

「満員バス地球号」の運転台に群がっている連中は、このバスを走らせることに懸命だ。経済成長率や、生産性、物価上昇率などの計器をにらんで、どれも悪くすまいと頑張っている。だが車内の乗客、とりわけ前部座席を占める人々の間では、従来の計器では計れないことに関心が移ってしまっている。より速くバスを走らせたり、より広い座席を奪い合ったりするよりも、ずっとおもしろいことを見つけたのだ。

人間の備える「やさしい情知」は、足りないものを節約することが正しいと信じる倫理観と豊富なものを沢山使うのが格好よいと感じる美意識を育てた。このことは歴史が証明している。環境や資源の壁を人口増加の狭間に立つ現代人もまた、この事態に適した倫理観と美意識感を持ち出した。それは客観的な物量よりも、主観的な満足を求める欲求を生んだ。

「近代」を走り続けることだけが進歩と信じる人々は、それを様々に批判するだろう。だが、この精神が新しい発展段階「新しい価値観」を創り出す可能性が強い。

受けるよりも与える方が幸いである

日本が今後、タイ王国に奉仕できることは多くの観光客を送り込むことであろう。タイ研修最終日、私たちは観光ツアーとなる。人間の本性が発揮されるときである。だれもが買いあさる。おしげもなく高額の円を落す。物財中心の価値観をもつ近代人といわれる人の最も実行可能なこと。そしてそれなりに自分が満足し、他者に多くの奉仕となること。それは観光であり、買い物ツアーである。JICAの企画部で計画し、高校生の修学旅行団を途上国に送ってはどうか。究極的には「受けるよりも与える方が幸いである」という価値観に到達することを私は信じている。